
アドネイル

TOLA

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アドネイル

【Nコード】

N4917D

【作者名】

TOLA

【あらすじ】

実世界で大きな反響を呼んだゲーム『アドネイル』その世界の中に閉じ込められてしまった実世界の人々。その世界の中で繰り広げられるちよっとの勇気を描いた物語。

第0話：プロローグ（前書き）

初投稿です。

ありがちな設定とありがちなネタばかりの小説でございます。まだまだ不慣れなのでのんびりゆったり投稿していきたいと思います。長くなればなるほど、きっと自信がついていくと思います。

頑張ります！

第0話：プロローグ

仮にこう言っておこう、実世界と違う世界は存在しないと。

人が頭で認知してそれを世界と定めたら、その人の中ではそれが世界になるのだから。

アドネイル・・・世界を震撼させた事件の真ん中にこのゲームはありました。

そのゲームをすると実世界から切り離され、ゲーム世界に閉じ込められてしまいます。

実世界ではUFOに攫われた、鬼隠しに在った、とされて存在が記憶にしか残れなくなる恐ろしい現象。

この物語はアドネイルの世界に迷い込んだ人々が見た、小さな小さな勇気を描く冒険譚である。

第1話：序章の1

そこはオークス大陸のど真ん中。
セントラル・マリアという名前の世界最大の街である。

建物は古風といえいいのか、レンガとそれを固める漆喰が辺りを埋め尽くしている。

左右に立ち並ぶ淡い肌色の壁と足元の赤茶色のレンガ、カラフルな原色に染められた屋根と高い高い青空。

通りの突き当りには噴水のある大きな広場があり、人々が憩いの時間を過ごして・・・

いるとはいいがたい状況であつた。

仮設テントと書かれた壁の無い小屋のような建物に肉団子が・・・
ゲフゲフ・・・大勢の人々が集まっている。

皆口々に何かを言っているように聞こえる。

うつむ・・・しかし・・・何を言っているんだろうか。

この世界にはリウラーオーブという水晶玉が5つ存在している。
それぞれがマリアン・アルフ・ギガント・モルト・アールイという
名前。

そして、それらは種族ごとの占有大陸、マリアーナ・アルフエイト・
ギガノール・モルテオール・アーレライに大事に保管されている。

そう、この世界には5種族が存在している。

大陸名にも起因するが、人間族・翼人族・巨人族・小人族・獣人族

である。

この大きな街セントマール・・・これは俗称である・・・にはこの5種族が入り混じっての生活をしている。

生活習慣や文化も色々と都合のある5種族がそれぞれの言葉で口々に・・・

うつ・・・想像するだけで頭がグラグラしてきそうである。

しかし、これは本来ありえない現象なのである。

なぜなら、そんな迷惑な設定のゲームは非常に不便なのだから。

第2話：序章の2

事件は3ヶ月前に発生した。

アドネイルというゲームは過去5年間の売り上げ世界No.1の大人気商品。

どんなハードにも対応したソフトのバリエーション。
通信による多人数型のRPGである。

そして4ヶ月前、アドネイルを製作をしたゲーム会社が専用ハードを発表。

感覚性ヴィジュアルメディアという名目で発表されたこのハード。
見た目はマッサージチェアである。

背もたれの付いた大きな椅子にごちゃごちゃと沢山付いているわけだが……。

頭の位置には視覚、聴覚、嗅覚を制御するマイク付きのバイザー。

肘掛にはハンドキャプチャーと呼ばれる触覚を制御する装置。

椅子の中には振動装置が多数ついていて、状況によって振動するようになっている。

お値段は税込みで給料6ヶ月分と言ったところか……。高えええええ！！！！

しかし、これがなかなか侮れない……。世の暇人はおおいに喜び飛びついた。

そして世界に十数万台ものマッサージチェア……。ううむ……。製品名は型番で長いから省いてもいいはず……。が放流されていたのであった。

そして事件が起こった。

失踪事件である。

ゲームをプレイ中の人間がいつのまにか消えてしまうという事件だ。はじめはゲームのし過ぎで頭おかしくなったんじゃない？説が有力であったが、警察や政府役員の中にも同じような失踪騒ぎが起こり、事件は大きく発展していった。

警察の調べた結果・・・まあここでアドネイルの名前がでることは読者の皆さんは予知能力にて先見しちゃってるだろうけれど出しましょう・・・失踪した人は皆、その日にアドネイルをプレイしたことが分かったのである。

その後の対応は早かった、製造ライン凍結、販売会社への追求、被害者拡大のストップ。

そして、行方不明者の搜索・・・
ヨクアルパターンダネ。

しかし、一向に解決する気配はなく、3ヶ月の時が過ぎるとともに人々の頭からアドネイルの文字がだんだんと薄れていこうとしていた今日であった。

第3話：序章の3

さて回想が長くなってしまった、このままでは話が進まないのでも本腰入れて物語に触れていこうと思う。

場所を広場に戻して、先ほどのテントの肉団子・・・もとい人々の声を翻訳してみる。

「いい加減ビスケット飽きたから他の出せよー」

「はあ・・・ここ最近毎食こればかりだよ・・・トホホ」

ビスケットと呼ばれたこの食べ物、アドネイルではお馴染みになっている携帯用非常食である。味はまずくないといった感じで、街の自治を行っている職員が無料配布してくれる。

しかし、配布されるのは街のギルドに登録を済ませているオードと呼ばれる人で、一般の住人には基本的には提供されないのだが・・・。

8

「はあゝはやく元の世界に戻れないかな」

「おい！ 愚痴でもそれは禁止用語になってるんだぞっ！」

「分かってるよー・・・でもよおー・・・」

事件の失踪者・・・実世界では存在が記憶だけになっている人たち・・・

そう、アドネイルをプレイしてた人たちは、アドネイルを未だにそして、戻れることなくプレイを続けているのである。

3ヶ月前に起こったこの現象、初期の事件被害者達はこのゲーム世界にも慣れ、委員会を発足し事件解決への運動や被害者支援を行っている。

携帯食料の配布もそうだ。

ここまでになるには大変な努力が必要であつたと役員は思い出話をするであろう。

感覚が実世界のままでゲーム世界に入った。

当初はコマンド系統の操作感・・・うむ・・・簡単に言うとは決定ボタンやキャンセルボタン等のことだが、それらが実世界感覚ではどのように対処すべきか分からなかった。

用は扉を開けたりアイテムの管理などができなかったのである。

あ、そうそう

とりあえず翻訳して、意味の分かる文字で会話を表したわけだが実際にはガオーとか意味の取りにくい人語、まったく聞こえない波長の音声、まあいろいろと飛び交っているのだ。

5種族はそれぞれ文化や言葉が違つたため、何も無い状態だと会話がまったくできないのである。

さて、ではどうやって話をしているか。

オードという仕事というか・・・まあゲーム上の役職があり、それについた人をオードと呼んだりしている。

オードになると・・・というかゲームシステムにならないと遊べなかったりするんだけど・・・オードが支給される。

そしてオードを持つ者同士だと種族間関係なく会話ができるようになるのである。

また初期設定で選んだ出生地が同じ場所同士のプレイヤーなら会話が可能である。

広場の騒ぎも幾分静かになり、時折笑顔も見れるようだ。

憩いの場として作られた広場。

真ん中にある噴水には輝く白色の素材で作られた、裸体の女神像の姿が見える。

水の噴射口が真ん中とそれを取り囲むように6つ存在している。世界の大陸の数と同じで、それぞれの場所も似せて作られたのだ。

その噴射口から一定の周期で水が飛び出し、幻想的な光景を現してくれている。

女神像は真ん中の噴射口から水が出てくるとその水の中に一度隠れてしまうのだが、6つの噴射口からの水を受けるとまるで水の衣を巻いたようにその姿を変貌させるのである。

しかし、今は6つのうちの一つが壊れてしまっているようだ。水が出てこない。

そのために女神像の水の衣はまるで絡みつくように女神を締めつけているように見えた。

少し冷えた風が混じりだした。

テントの肉団子も散り散りになって広場は静まっていく。

それと同時に夜の暗闇もだんだんと色濃くなってゆく。

3ヶ月間で色々な発見をし、遅しく生活している人々。

その姿を高台に作られた建物の窓から見つめる影があった。

その影は大きく、そして恐ろしくもある。

人々を見つめるその瞳からはとても暖かな光と困惑の念が感じられた。

彼の手には数枚の書面が握られており、いや、すでに握りつぶされていた。

背中やはり小刻みに震えているように見える。

そんな背中を見つめる一人の小人族がやはり同じように暗い顔をしている。

安定し始めた生活、人々の活気が響くこのセントマールだったが、
安穩と生活ができるほど・・・事態は甘くは無かったのであった。

第4話：序章の終わり

「やはり、発見できないか・・・」

見るからに大きな体がわずかに小さくなった気がした。彼は巨人族、身の丈2メートルは当たり前で中でも大きな人になると4メートル近いというから驚きである。

ガッチガチの上半身に不釣り合いなスーツを着こなしている。

彼のスーツではきつと、”しわ”等という単語の存在は奇跡である。

彼の名前はギーグル、セントマール自治委員会の巨人族代表である。

ギーグルの後ろから小さな影が現れた。

「うーん・・・となるとあまり闇雲な搜索はかえって危険ということかも」

彼は・・・彼・・・うーん・・・

小人族である彼、ゴールド。やや高めの声とどうみても女の子の顔立ちで男の子と胸を張って言われても困るのだが、プレイヤーの趣味が伺えるというか・・・。

ギーグルの手のひらに収まりそうなマイクロボディ、というよりは時折収まっている光景も見られる。ゴールドも同じく委員会の代表である。

渡されたのはアドネイルでの行方不明者の捜査結果であった。

このゲームでは街の外に出るとモンスターが徘徊している危険な場所があり、洞窟や遺跡などのダンジョンも存在している。

最近までは操作感の違いがあるため外出は禁止されていたが、動き

方を覚えたプレイヤーの中には外に飛び出す者も増えてきたのである。

「・・・このままでは行方不明者が増える一方だ」

「ねえ、ギギー。もうこれ以上は僕らの手に負えないよ?」

「うむ・・・」

彼らが懸念していること、ゲーム世界から戻る手段として初期の人々が行った行為。

ゲーム世界でのゲームオーバー、自殺することによって元の世界に戻るのではないかと考えた人々がいた。

しかし、ゲームオーバーしたとしても戻れないことが分かったのである。

さらに言うならもつと良くない状態になった。

「公表はしているはずなのに・・・」

「ギギー・・・」

「アドネイル・・・世界の囚われ人・・・むむむ・・・」

アドネイルの世界でプレイヤーが死ぬと通常はGPゲートポイントに戻るか否かを選択できる。戻るを選ぶと経験値、お金などが一定値減った状態でGPに戻る。

という仕様なのだが・・・

事件以降、プレイヤーが死ぬとそのまま目の前から消えてしまい、実世界にも戻されることなく本当の意味で行方不明になってしまうのである。

大きさの合わない二人が悩んでいる所に騒々しい足音とともに厄介がやってきた。

扉が大きな音を立てて開けられる。

「ギーグルさん！ た、大変です、敵襲が」

二人は目をカツと開くと入ってきた伝令に向き直った。

「おのれ・・・間が悪いのは奴らの専売特許なのかつ！？」

「落ち着けギギー、オード全員を招集。街の被害を防ぐんだ！伝令まわせ！」

「了解、全オードに告ぐ。緊急事態発生、各自持ち場についてください。」

伝令は持っていた拡声器のようなもので大きく叫んだ。

セントモール広場に非常召集令がかかった。

大きな焚き火が辺り一帯を明るく照らし出す、そこには様々な武器を持った面々が集まった。

皆の目は一様に正門を見つめている。

大気が震えているような緊迫感、中には本気で震えている者もいる。やがて、それは姿を現した・・・。

頭に角、大きく開いた口にはキバ・・・人のそれとよく似た体躯。

手にはこちら数々の武器を持ち、隊列を揃えるオード達を見据えている。

ギーグルがスーツの襟を掴んで、おもむろに上へと引き抜いた。

スーツはビリリと破け、中から鍛えられた肉体が現れた。

「回復最優先だ！ 死者はだしてはならん！ そして、決して街を渡してもいかん！」

「全員、細心の注意を払い迎撃せよ！」

うおおおおおおおおおおおおおおおおおつ
つ！！！！！！

「後、ギギー」

「なんだっ！」

「格好付けるのもいいが、服がもったいない」

「……………う……………うおおおおおおお！！！！」

「やれやれ……………こう度々破られてはスーツも可哀想だよ」

地響きはセントマールを揺らした。

怒号や絶叫が飛び交う広場。

いつしか止まっている噴水は、闇夜の中でもその色がかかるくらい
赤く……………赤く染まっている。

敵、敵と呼ばれた者。

ゲームの中で彼らはオークス、鬼人族と呼ばれている。

オークスは口々に何かを叫びながら迎え撃つオード達を次々と切り
裂いてゆく。

辺りには次々と痛みを訴える者、言葉を発せない者が生産された。

オードの部隊は散り散りになりながらじりじりと後退する、負傷者
が居た場合は最優先で治療に当たっている。

しかし、オークスは留まることを知らない。

見境なく目の前に来る敵を引き裂いては払いのけて、前進あるのみ
である。

オーク部隊の後方から一際目立つ御輿が現れた。

真つ赤な台を大きなトカゲのようなモンスターに引かせている。

意味を持つであろう模様の書かれた旗の前にゆったりした椅子が置かれ、今は使われていないその椅子の主が右手を体の前に伸ばし叫んだ。

「ものどもおっ!!」

迷おことは無いっ!!

この祭りを彼奴らの血で華やかに染め上げい!!」

うおおおおおおおおおおおおおおああああああっっっ!!
!!

大きな唸りが街全体に広がり、響くわたる振動が窓をも破る。

御輿に立った少女は目を軽く閉じながら椅子に納まった。

不意に手に取ったオーブによく似た丸い玉を取り出し、開かれた瞳はそれを見つめる。

「・・・返さない・・・もう・・・」

つぶやいた少女の持つ黒い玉にポタリと滴が落ちた。

まだ雨は降っていないが、雲行きは嵐を予告していた。

やがて、喧騒が遠く遠くへと移ってゆく。

皆が集まっていた広場は、ぎこちない静寂と疲労した空気を残している。

明かりが奪われ、小さな焚き火の残りがちろちろと辺りを照らしていた

その中で真つ赤に染められた噴水の女神像は血の涙を流し続けてい

た。

第4話：序章の終わり（後書き）

以上前置きでございます。本編も頑張っていきます。

第5話：アルフの港にて

オークス大陸の悲劇が人々の心から薄れだす、五年というゲーム時間を数えたアドネイル・・・

ここは5種族占有大陸の一つアルフェイト。
アドネイルにある7つの大陸の一つである。

大きさは7つの中では真ん中くらいで、唯一の金属建築物である試練の塔が大陸の北の端に立っているのが特徴。

このアルフェイトには、翼人族が占有種族として暮らしている。

翼人族とは名前の通り背中に翼を持った人のことである。

見た目は人間族と大差ない、大きな翼以外で違いを挙げるならば髪の色が途中から変化したりしているところなどである。

占有大陸というのは種族ごとの故郷みたいところであり、大陸ごとの名前に沿った種族が住んでいる。もちろん、まったく他の種族が居ないわけではない。

例えばこのアルフ・バリオトのような大きな港街などに行くと、体の大きな巨人族が自分の体よりも大きな荷物を持ち上げたりする光景があり非常に壮観であるが、監督官として小人族などが居たりするとなかなかユニークな光景とも取れる。

そんなのどかな風景に溶け込むようにのどかな声が聞こえてくる。

「ちょっとアリス！ いい加減にしなさい！」

「やーだよ！ これは私のよ」

二人の娘が港に下りる坂道を片方は走って、片方は飛んで下ってくる。

人間族と翼人族であろうか。

人間の少女によく似た彼女は茶色の髪を忙しく後ろに流している。
真っ赤な瞳は笑顔に半分隠れている。

薄い緑の服に白っぽい前掛けを付けて、意気の合う相方の手を振り切っている。

そして前掛けの紐を必死に掴もうとしている翼人の少女。

金色の長い髪が太陽に透かされてさらに輝きを増している。

こちらは空のような青い瞳が必死にエモノを捉えている。

淡い茶色の服に真っ白なエプロン、その背中には一対の翼。

あまりスピードは出てないようだ、ゆっくりと上下に揺れている。

アリスと呼ばれた少女は、空からふわりと舞い降りたもう片方に驚き、彼女の目の前で止まろうとしたが足がもつれて転んでしまった。

「わわっ！！！」

「きゃー！」

二人は仲良く一回転すると、そのまま仰向けになって笑い出した。

今日はいつもより雲が大きく見える。白と青が空を半分に分けて輝いていた。

「ねえアリス」

「うん」

不意に翼を撫でながら翼人族の娘ヨミは言った。

「今日の晩御飯のおかずさ、またお魚なんだけれど」

「うん」

アリスは空を見たまま生返事をしている。赤い瞳はじっと空のどこかを見つめたまま、ゆっくりとした呼吸が彼女の体を流れている。

「昨日、流石に飽きたっていったけれど・・・」
「うん」

ヨミはじとーっとアリスの顔を見つめる。アリスはこちらも見ずに返事をしている。

次第にヨミの拳に力が込められるのが感じられた。

アリスはヨミの震える手を見ながらにひひーと笑い声を漏らした。

「アリスー！ 貴方がイヤイヤ言うから聞いているのにー！」

ヨミはアリスに覆いかぶさるとほっぺたを両方の手のひらで抑えた。アリスの顔は手で挟まれてぶっくとなった。

「じゅい、わゆあつら」

声を聞いてヨミが手を離す。

「うん、昨日は駄々こねてごめんなさい。お魚嫌いじゃないからいいよ」

アリスはにこっと笑って見せた。ヨミもつられて笑みが漏れた。

港に二人の笑い声と海鳥の泣き声が波と混ざって響いていた。

今日は週に一度、隣の大陸であるモルテオールから積荷が届く日であつた。

大陸と大陸の間にはなんらかの形で隔たりがあつた。

アルフェイトとモルテオールの間には海と呼ぶものに近いものが存

在している。

浮力のある素材を使えば、船として大陸間の移動ができるというわけだ。

と、そこに大型の貨物船が鐘を鳴らしながら来航した。

木を組み合わせて作られた巨大な船で、風を受けるための帆が今は閉じられているのが分かる。

ズーンと柔らかな素材がついた胴体部が港の壁面にぶつかる。

そして、程なく貨物船は動きを止めた。

日の光が波間に反射してアリスの顔を照らした。

アリスは貨物船の方角を見つめていたが、その目の焦点はどこか別の遠いところにあった。

「アーーーーーリスッ！」

はっと我に返ったアリスは自分の手の中にあったペンダントが奪われていることに気づいた。

二、三度手を閉じたり開いたりして

「あー!!」

ヨミは笑顔のまま坂を駆け下りていく。

首元にはアリスがさっきまで手にしていたペンダントが下げられている。

どこにでもあるペンダントで中に写真が入っていた。

アリスは一瞬むっとしたが、顔をゆっくりと崩して小さなため息をついた。

貨物船から大きな木箱が降ろされてゆく。

クレーンでつられた荷物は港の広場に規則正しく並べられ、その周りには人が集まりだしている。

ヨミは木箱の一つに歩み寄ると

「船長ー、今日は何が獲れましたー？」

大きな声でクレーンにつられた木箱に乗る男に声をかけた。男はクレーンの紐を掴むと、ぱつとその場から飛び降りた。木箱にくぐられた紐を使い、振り子のようにヨミの辺りまで……。

そして手を離し……しゅたっ！

「よう嬢ちゃん、今日は見えたことも聞いたことも食べたこともない新鮮な食べ物で沢山獲ってきたぜ！」

「そんなこと言って、また渡りキオスばかりなんでしょ？」

「あちゃー、それは言っちゃあなんねえよ！」

渡りキオス、アルフェイトとモルテオールを繋ぐ海と呼ばれるところに生息する一般的な魚の”群れ”の総称を言う。

正確には数種類の魚の群れが大陸間の流れにのって泳いでいることを渡りキオスまたはキオスとここでは呼んでいる。

個別に魚の名前はもちろん有る。

大きな口をしたオオクチ

真っ赤な背びれのアカビレ

お腹の白いハラジロ

等である。

分かりやすさでは、アドネイルの中でも高評価を得ること間違いないであろう。

今日はオオクチの数が多いようだ。
選別しなくても見るだけで分かるから困った大口だ。

ヨミはかごに移してもらったキオスを見ながら晩御飯の献立を考えていた。

ここ数日御飯はいつも魚ばかりで、ついに昨日アリスが我慢の限界に達したところであった。

バリオトはアルフェイト唯一の港町であり、確かに魚の収穫は多いのだが・・・

別に他の食材が手に入らないわけではない。

貨物船で運ばれてくる食材の中には陸上のモノもあるはずであった。しかし、ここ数日は魚以外の食材がまったく運ばれて来ないのである。

理由は分かっていた。

オーク達、鬼人族が原因なのである。

第6話：さざ波が連れてきた事件

5年前に起きたオークス大戦争。

アドネイルのゲーム内容に中央大陸争奪戦と呼ばれる定期的な大戦争イベントが存在する。

占有大陸に所属するプレイヤー同士での戦争がメインで、世界の中央に位置するオークス大陸の覇権を得ることが目的である。

戦争に勝利し、オークスの占有権を取得した種族は大きなメリットを得るのである。

が・・・

5年前のそれはイレギュラーなものであった。

アドネイル事件、実世界の多くの人々がゲーム世界に閉じ込められた。

閉じ込められたプレイヤー達は大陸間戦争という茶番なんかよりも、今後の自分のことで精一杯であった。

アドネイルに囚われたプレイヤー達は、事態の解決を行うため、取り決めを行い委員会を発足した。

その取り決めの中に大陸間戦争はしないというものがあり、以降数ヶ月、アドネイルから戦争の音が消え去ったのだ。

しかし、大戦争の2ヶ月くらい前から変な噂がたち始めた。街の付近で鬼人族を目撃したという噂である。

そして、その噂は鬼人族達によるセントモール侵略、ひいてはオークス大陸の略奪という最悪の形で証明されることになったのだ。

鬼人族はNPCとしてプレイヤーの敵キャラとして登場する設定なのだ。

彼らはもとオークス大陸に住んでいた、それを戦争にて過去の5種族が大陸から追い出した。

というのがアドネイルのサブストーリーである。

そして、ゲームをプレイしていくとガルガニアン大陸にてイベントなどがあり、鬼人族と出会うことができるのである。

だが、これはあくまでゲームの公式設定であり、今現在の状況ではどうにでもいいということとなる。
ただ、この公式設定がどこまでこの異常事態のアドネイルに関わってくるのか。

謎は未だに明らかになってはいない。

そしてプレイヤー達の混乱とは裏腹に数十回におよぶ鬼人族のセントマール襲撃が行われたのである。

鬼人族に殺され次々とLostしていくプレイヤー、それはつまりゲーム内での存在すら行方不明となってしまう恐ろしい現象。

委員会で懸念された戦死によるLost回避は、鬼人族の侵略により見事に打ちのめされたのであった。

そして戦争終結後、オークス大陸は鬼人族の支配となった。

生き残ったプレイヤー達はそれぞれの出生地である占有大陸に逃げることで鬼人族から逃れたのだった。

鬼人族が手に入れたオークス大陸は世界の中心という都合により、交易の柱を担っていた。

そのためオークスによる支配の結果、周囲の諸大陸との物流が一方

的なものとなった。

交易の占有は5種族の占有大陸に等しく貧困を与えるものであった。これにより、オークス大陸奪還は困難を極め、後の二度の大戦を経ても受け入れられなかったのだ。

ゲームの時間で5年を経過した今、プレイヤー達はここでの生活に慣れてきたせいもありゲームの世界での生活も悪くないと考える者も出始めたのだ。

世界の中心であったオークス大陸と、散り散りになってしまった5種族代表がまとめる委員会。

それらを失ったことは人々の中で大きな傷となり、問題を解決しよう、実世界に戻ろう、と考える気持ちを少しずつ削り、今や実世界の存在は、プレイヤーの頭から次々と忘れ去られてしまったのである。

「・・・私たちのこれからは一体どこへ向かって・・・」
ため息がもれた。

一人の翼人族が持っていた手帳をパフと閉じる。

手帳にはこれまでのアドネイルの歴史が綴られていた。

裏側にはリウラーオーブの文字が刻まれている。オーブの守り手という意味だ。

彼女は視点を窓の外に移す、ちょうど港に停泊した貨物船の荷降ろしが済んだところのようだ。

彼女は椅子から立ち上がると持っていた手帳を床にポイッと放り投げた。

ポトンと落ちた手帳に少し後ろめたさを入れた視線を送ると部屋を出て行った。

また貨物船の鐘がなっている。

出向のために荷物を積もうとしているようだ。

港にはおおいに人が集まっていた。

荒々しい風情の男性キャラクターが多いようで、辺りには威勢のいい声が響いている。

ヨミの姿が市場の先に見えた。アリスと一緒にのようだ。

「ごめんねアリス・・・今日もやっぱりお魚になっちゃうの」

「うん、まあ・・・しかたないよ。うん、しかたない。」

ヨミはアリスの笑顔を見ると苦いものを食べたような顔をした。

「そんな顔しないでよー。わたしも一緒に作る」

「・・・」

「ヨミ・・・そんな顔したら・・・泣きなくなっちゃうよ」

うつむいたアリスにヨミは驚き、慌てて声をかけた。

「あ、あ、あ、ああ。わたしったら、アリス、もう大丈夫。大丈夫よ。」

「うん、良かった。」

二人が周りの空気をやわらかいものに変えているとき、遠くから珍事を知らせる歓声が上がった。

なんと、山の辺りの集落から荷馬車が届いたとのことだ。

街ごとに市場を管理するシステムがあり、荷馬車は自動的に物資を他の街に輸送する。

大陸内の街ごとの物資を計算し、過不足無く物資が行き届くよう設定されている。

しかし現在のアドネイルでは、ゲームが管理していたシステムは通常とその動作を変えてしまっているため、ほとんどが理解できないところでシステムが動いている。

この荷馬車も普通なら姿を見ることができないのだ。

普通ならカーソルを合わせて、説明文を読まない名前すら出てこないのである。

そして、今その荷馬車が目の前に現れた。

馬が二頭荷車に繋がれている。栗毛と肌色のような白い毛並みの二頭。

荷車には運転手ノンプレイヤーキャラクターが乗っている。

おそらくはNPCであろう。

男が一人、声をかけているようだ。

メモが数枚交換されたあと、荷馬車に積まれていた木箱とごわごわした袋が降ろされる。

荷物が降ろされた後、荷馬車はすぐに街の入り口から表に出て行ってしまった。

荷物が置かれた場所に人が集まってゆく。

アリスとヨミもそこへと向かった。

先ほどメモを交換していた男がこの街を管理している首長を呼んだ。首長は後ろに付き人を引き連れ、荷物のある場所まで飛んできた。そして男と一言二言会話をすると皆の前に向き直った。

「皆よく聞いてください。山村のアルフ・イトは・・・」

皆の空気が少しずつ濁ってゆく。

「アルフ・イトは、モンスターの襲撃を受け崩壊。村人はNPCを残し非難。現状は生存者等の情報は無し。この移動された物資はこちらから以前送り出したものが戻ってきたものである。」

辺りがざわつき出した。愚痴をこぼすもの、近くの人に抱きつき涙を流すもの。

「どうやら久しくじっとしていたあいつが姿を見せたようだ。」

首長は噛み締めるように自身に言葉を投げかけた。

「このままではいずれ他の街やこの街も、イトのようになってしまふ。それだけは断じてあってはいけないことだ。」

観衆は押し黙ったままで、首長の言葉を待った。

首長は少し目を閉じていたが、やがてうつすらと目を開けると言葉をつむいだ。

「そこで、以前にアドネイルで白龍を倒した経験のある者。いや、戦っただけでもいい。アルフトドラゴと戦ったものが居るならば今夜、今夜集会所に集まって頂きたい。」

観衆の視線を一身に受け、首長は体を震わせながら右手を突き上げた。

「討伐隊を結成し、白龍を討伐する！」

うおおおおおおおつつつ!!

アリスとヨミも周りの雰囲気に合わせて

「わぁーーーー!!」

「おーーーー!!」

と声をあげた。

第7話：港の夜

ここは街の集会所。

首長の呼びかけに応じて街の全てのプレイヤーが集まった。

その数15人、少ないと感じるが街の人口の大半がNPCであるため仕方が無いのだ。

もちろん戦闘をするNPCも存在するが、それには傭兵の手続きが必要になる。

さらに、傭兵を雇うには膨大なお金がかかるため現状では使用できないのだ。

このアドネイル、戦闘方法は3Dアクション。バイザーとハンドキヤプチャーによってプレイヤーの感覚により近いところでキャラクターが動くという画期的なものだ。

そして、キャラクターにはLvと呼ばれるカテゴリは存在していない。

キャラクターのステータスは以下の二点、装備品とアイテムなどの外部的要素のステータス変化、あるいは種族ごとの固有スキルにて決定されている。

つまり、単純にプレイスキルがそのまま戦闘時の強さとなる。

よって、キャラクターが持つ強弱の差は少ないのだ。

アリスは13歳くらいの少女、ヨミは16といったところか。

彼女達がちゃんと集会所に集まっていることは、この世界がアドネイルというゲームであることを再認識させてくれる。

近くに居る翼人族の青年達やアルフェイトでは珍しい巨人族のプレイヤーに囲まれながら、和やかに会話を楽しんでいる。場違い極まらない。

首長がざわつく集会所に入ってきた。

二人の付き人が箱をそれぞれ担いでいる。

皆の前に立つと一度ゆっくりと全員を見回し、そして

「皆さんよく集まってくれた。これより白龍討伐のため集会を行う。」

首長の話はこうだ。

昼に到着した荷馬車、山村イトにモンスターの群れが押し寄せ住民は逃げることを余儀なくされた。

後の調べにて、幸いに村にいたプレイヤーの無事が確認された。

そして、その人が言うには群れの中に強力な飛龍フイバーンが混じっていたとのことだった。

この辺りの飛龍は長である”アルフトドラゴ：白龍”の統括のもと生活している。

よって、白龍が何らかの理由で街を襲うよう命じていると考えられるため、街に被害が及ぶ前にこれを討伐、または、撃退すること。それが集会の議題となった。

話し合いが続き、討伐隊の編成や作戦などが決められてゆく。

部隊分けされて意気込むものや、箱の中に収められた支給品の武装を手取るもの、作戦の確認を行うものなど様々なプレイヤー達。そして、話し合いが終わった。

首長が全員を前に話し合った結果を報告する。

「では、確認してください。作戦予定日は・・・」

作戦予定日は3日後。天候が晴れてる場合のみである。

天候の悪い日は飛龍に分があるからである。

部隊は3部隊、陽動隊、討伐本隊、遊撃隊。

アリスとヨミは遊撃隊に入った。

主に本隊の援護支援を行う部隊である。

陽動隊は、モンスターが群れであることを考慮し戦力を分散させることを任務とする。

そして本隊、所属するプレイヤーは自身のスキルを誇っている猛者達である。

また、個人的に武装を持っている者もこれに含まれていた。

山村イトを南に少し行くと大きな平野があり、小さな川が流れている。

ここを主戦場に構え、モンスターの群れをおびき寄せる。

相手の戦力が減ったら白龍の巣である森の中に進軍する。

「以上が作戦の概要です。各自アクションの再確認と武装の手入れをお願いします。」

集会は終わった。

集会所から人々が戻ってゆく。

アリスはヨミともう一人、アリタと名乗る今回の遊撃隊のリーダーの3人で話をしていた。

「お二人は事件後のアドネイルで戦闘を行ったことはありますか？」

アリスとヨミは街の近くにある草原によく遊びに行っていた。

花を見に行ったり、薬草を摘んだりしていたのだ。

その草原には攻撃的なモンスターはあまり活動していないため、戦闘が起こることは少なかった。

二人は顔を見合わせて、声に出さない会話をしたように見えた。そして居直った彼女たちは少し照れたような顔で答えた。

「まったく経験ない・・・かな。ヨミと遊んでるばかりで」

「はい、まったく・・・以前草原に行ったときにオオカミを遠目で見たくらい？」

揃ってにつこりと微笑んだ二人を見て、アリタも少し笑みを見せた。

「分かりました。それでは明日から少しトレーニングをしましょう。」

「

二人はハイと元気に答えるとアリタにおやすみを言って集会所を後にした。

家に着くまでの道でアリスは思い出したかのように話し出した。

「あ、そういえば、私たちまだ晩御飯食べてないかも？」

「！っ」

「だよね、食材探ししてたら日が暮れてたような気がする」

「結局お魚しか見当たらなかったけれど・・・」

「うっ・・・ん・・・」

うつむきがちなヨミを斜め下から見上げる。

アリスは困ったような顔をしてみせた。

そして、急に足を止めた。

「アリス？」

「わたしのせい・・・かな」

「え？」

「わたしがわがまま言ったせい・・・だよね」

自分の服の裾をぎゅっと掴んだまま、次第に涙で瞳がぶれてゆく。

「ヨミ、いつもお魚でごめんねって言うてたのに、わたし・・・」
「アリス・・・」

少し冷える風が二人をかすめてゆく。

夜空は少し雲があるせいで星が隠れているようだ。

「・・・アリスが怒ったときね」
「・・・」

「わたしも魚に飽きてきてて、同じように怒っちゃったのよね」
「うん」

ヨミは空を見上げながら、後ろに回した手をそのまま下に伸ばす。

「アリス、泣いちゃって。わたしあの後猛反省しちゃった。」
「・・・」

「アリスも・・・アリスも同じように思ってくれてたんだ。」
「もちろんだよ！」

「わたし料理できないからいつもヨミに頼っちゃって・・・」
「・・・」
「それで・・・それで・・・ううう」

アリスはうつむいたままフルフルと震えだした。

「アリス・・・」

ヨミの手がアリスの頭にポフッと乗った。

ビクッと体が震えたアリスはそぉーっとヨミの顔を見上げた。
そこには夜空を吹き飛ばしそうな笑顔があった。

「アリスはやっぱりわたしのアリスだね」

「・・・はえ？」

「ふふっ、いいの。気にしないで。」

ポフポフポフ・・・

「・・・うっ・・・むむむ」

「ふふふ」

いつまでも頭にポフポフし続けるヨミと頬を赤くしながら目を逸らすアリス。

丘の下では召集されたプレイヤー達が街の明かりを頼りに外でエンヤエンヤと騒ぎたてていた。お酒と今日入った魚で盛り上がる。人々の顔には笑顔が見えた。

そして、明日からは打倒白龍を念頭にした訓練が始まる。

港を包む空気も人々の気迫に押され、だんだん熱くなっていく。しかし、夜空は今までと変わらずにただしつとりと港を包んで、静かな時間を丘の上で笑い合う二人に送り届けていた。

第8話：ふわりとした朝日と

朝日が昇りヨミの顔を照らした。窓は白く曇って外の景色をぼやけさせている。

鳥の鳴声、ふわりと感じる活気ある港の空気。

ヨミはベッドの上で大きく伸びをした。

ひんやりとした朝の空気を感じて、ベッドから降りる。

窓ガラスをそつと手でぬぐう、今日は大きな雲が空を占拠している。水溜りのようなぼつぼつとした青空が雲の合間から見える。

「ふう・・・、今日はあまり甘やかせないわね。」

ヨミは軽く俯きがちに苦笑をもらした。

ここはアリスの部屋。

大きな本棚と大きな衣装箆笥、そして大きな工具箱。どれもアリスの背丈には合わない。

そして大きなベッドに大きなヌイグルミ、アリスはどこにいるのだろうか。

ヨミはベッドに乗ったヌイグルミをひょいと持ち上げた、すると下からおへそを出したまま眠っているアリスがひょっこりと姿を現した。

どうやら楽しい夢を見ているようだ、ニコニコしながら枕を抱きしめている。

「また・・・この子は・・・」

ヨミは持ち上げたヌイグルミをアリスの隣に置きなおす。

その手をアリスの額にあてると髪をすつと持ち上げた。
アリスはまだニコニコしている。

「・・・」

ヨミの手が止まった。

「・・・ハッ！だめだめだめ・・・いけないいけない・・・」

臉をこすりながらぶつぶつと独り言を反芻する。

「よし！」

気合を込めた。

「アリス、起きて。今日はお出かけする日よ。」
「・・・~~~~・・・」

アリスは何かモニヤモニヤと言った。
ヨミの顔が赤くなってゆく。

「アリス、朝だよ。ご飯食べてお出かけするんだよ？」
「・・・もゆ・・・ヨミン・・・みや・・・」

ヨミの顔はどんどん赤くなって手も少し震えている。
が、負けじと頭を振り、アリスが半分隠れている布団をぐつと引っつかむと、勢いよく布団を引っぺがした。

「アリスッ！いつまで寝てるの、起きて」

枕をぎゅっと抱えたままパジャマ姿のアリスは体をきゅっと縮めた。それを見たヨミはもう目が回っている、顔で目玉焼きが焼けそうだ。さらにアリスはニコニコしたままモニヤモニヤと寝言を続けた。

「アリス！」

「・・・んゆ・・・ヨミのん・・・ヨミ」

「アリ、ん？」

「・・・ヨミのいじわゆ・・・」

寝言と同時に枕をぎゅーっと握り締め満面の笑みのままですやすやと寝息を立てている。

ポフ！

盛大な音を立ててベッドに突っ伏したヨミであった。

ヨミが倒れたのを感じ取り、ビクツと跳ね起きたアリスは目の前の光景に驚いた。

布団が剥がされ全身を外に出した状態の自分と枕を挟んで、顔を布団にめり込ませたままピクリともしない相方である。

事態の把握に全力を注ぐアリスは困った顔をしている。枕を抱きしめたまま、アリスは沈黙した。

ふいにヨミの体がびくつと動いたような気がした。

アリスは目をパツと開けると、ヨミの背中を揺さぶった。

「ヨミ？ ヨミ？ 大丈夫？」

「・・・」

返事が無い。

「ヨミ?!」

アリスが慌てだした。

揺さぶっていた手を止め、ぐいっとヨミの体を仰向けにする。
ひっくり返されたヨミは目を瞑っている。

完全にパニックになったアリスはヨミの肩を掴んで相方の名前を呼んだ。

「ヨミ! ヨミイ!!」

「はい。」

目を閉じたままヨミが答えた。

「ヨミ! 大丈夫? 大丈夫なの?」

「う、うん。たぶん・・・大丈夫じゃないかも」

「え、え? 怪我したの? それとも病気なの?」

「それとは違うんだけど・・・」

「わたし何かできることある?」

「・・・うわ・・・」

「うわ?」

・・・ヨミは目を開けるとアリスの少し潤んだ瞳を見つめた。今にも泣きそうである。

「アリス」

「何? 何?」

「ちょっとだけ目を瞑ってじつとして貰っていい？」

「え？ え、あ、うん分かった。これでいい？」

アリスは言われたとおり目を瞑ってじつとしている。
ヨミは体を起こすと手を伸ばしアリスの肩に触れた。
ピクッと一瞬震えたがアリスはまだ目を瞑っている。

「起こすたびにこんなことしてちゃ、わたし・・・多分だめになる
かもしれないわね・・・」

「・・・？」

「ホント、ため息出ちゃう・・・アリス」

「ひっ！ はい・・・。」

「・・・」

「・・・」

ヨミはそのままゆっくりと手をアリスの背中に回して、相方をふわりと抱き寄せた。

ぎゅっと引き寄せられたアリスは勢いで目を開けた。

「ヨヨヨ、ヨミ?!」

「ん？ なーに？」

アリスは慌てている。アリスはとても慌てている。さらにアリスは慌てている。

「え、あ、あととと、えあう、うう」

「かわいいアリス。」

アリスは頬をぱつと赤く染めると衝撃に備えた。

「あんまり無防備にしていると・・・」
・・・ドクン・・・ドクン・・・

「~~~~しちゃうからね」
「!?!」

ヨミはふわっとベッドから降りると鼻歌交じりにキッチンに戻っていった。

ベッドでは力の抜けきったアリスが呆然と扉を見つめていた。

するとそこにヨミの声が聞こえた。

「朝ごはんの用意するから、そのかわいい下着姿はさっさと片付けてね」
「!?!?!」

気づくと色々とおブナイところまでパジャマがずれこんでいた。
アリスは顔を真っ赤にして、そのままベッドに倒れこんだのだった。

一方、先日トレーニングの誘いを出したアリタは考え事をしながら丘を登っていた。

アリタは翼人族の女性キャラクターで妙齡かつ清楚な顔つきである。キャラクターのグラフィックはプレイヤーの趣味が色濃く出るものである。

エディット画面にてこの顔この髪型etcと決めていくわけなのだ。・・・そのエディット画面が異常をきたしたアドネイルに存在できなかった話だが。

「とりあえず一式揃えてみたけど・・・これは流石に無いでしょうね」

ちらりと大きな麻包みを流し目につぶやいた。

アリタは大きな木箱を台車に載せて運んでいる。

がらがらと音を立てながら丘を登る台車、かなり重量があるのだからかアリタの顔は真剣である。

やがて丘の上にある広場が見えてきた。

すると、そこには昨日の二人組みが揃って手を振る姿があった。

「おはようございます、お二人さん。」

『おはようございます。』

にこりと笑う彼女たちを見つめてアリタの顔にも緩やかに笑顔が混じる。

「ふう、流石に重かった。少し休ませてくださいね。」

アリタは台車にもたれながらヘタリと座り込んだ。

アリス達は持ってきた鞆から水の入った容器を取り出すとアリタに手渡し、自分たちもそれを手に取りゆっくりとアリタの手前に座った。

「それでは休憩ついでに、少し質問とか良いですか？」

「はい」「どーぞ」

アリタは簡単な自己紹介をしつつ、アリスとヨミに対して質問を始めた。

アドネイルのプレイ歴。

次にアルフトドラゴについての情報。

そして事件後のアドネイルについて……。

「……なるほど、大体の感じは掴みました。」

アリタは目を閉じながらうなづき、手を組んでいる。
ヨミも同じく少し苦い表情を浮かべていた。

そんな重い空気を感じないかのようにアリスは元気よく話しかけた。

「アリタさんって大先輩だったんですね！」

「……む？あ、さんはよしてくださいな。アリタでかまいませんよ。」

「ふ、はい。えっとそれじゃわたしのこともアリスって呼んでくださいね」

「同じくヨミと呼んでください。」

「はい、お二人ともよろしくお願いします。」

3人は休憩を終えるとアリタの指示にしたがって木箱の中身を広げた。

アリスが荷物をせっせと運んでいる中、アリタはヨミに小声で話しかけた。

「あの、アリスはもしかして……」

「はい。」

ヨミは話の先を自ら語った。

「アリスはアドネイル事件にて実世界の記憶を失っています。」

アリスは大きな荷物に悪戦苦闘していた。

時折、アリタ達の方を向きながらきょとんとしている。

「ふむ。」

第9話：特訓とピクニック

木箱の中身は多種多様な大きさの麻包みと木の板や棒だった。広場にはアリタ達三人のほかにも訓練を行っているプレイヤーがいる。

彼らは本隊に選ばれていたかとアリタは横目で見ていた。

そして、他にもNPCがちらほらと辺りに見えた。

NPCは訓練を行っているプレイヤーを見ながら、笑ったり同じ真似を試みたり、さらには会話を持ちかけてくるものもいる。

「これにはかなり驚かされましたよね。」

アリタが麻包みを解きながら感慨深げに語りだした。

以前のアドネイルではありえない光景だった。

NPCはイベントやクエストなど決まった時以外にアクティブに会話をしてくることも無かったのだ。

さっきのように関係の無い会話を自分からしてくることなど基本的には在りえない。

それが事件後のアドネイルではまるで生きているかのように会話をし、会話を記憶し、進展する。

「わたしはNPCとよく話をしますが、時折、プレイヤーと勘違いしてしまいそうになります。ふふふ。」

アリタは柔らかない笑顔を見せた。

「わたしはNPCとかプレイヤーの区別って全然分かりません。みんな同じような感じがする。」

「私も同じですね、とりあえずこちらに居るときは私たちはこちらの世界の住人でしょうから。」

「ふむ。」

話ながらも荷解きが終わり、ようやく本題に入った。

「では、遊撃隊の戦闘訓練、トレーニングを始めましょう。」
『はい。』

アリタはにこりと笑った。

「まずは得意な武器を・・・といたいのですが、事件後・・・いえ、こちらに来てからと言いましようか。」

少し言いよんだ、アリスの顔を見ながら苦笑が漏れる。

「装備できる武器を手につったり、それを使用したことはございますか？」

「無いです。」

「日常生活で使うものなら、包丁なんかはいつも手に持ったりしますが。」

「分かりました。」

それでは、とアリタは腕の長さほどある木の棒をアリスに手渡した。アリスはその棒を掴むとどうするの？と顔でアリタに問いかけた。

「ふふ。とりあえず、少しその棒で色々遊んでみてください。」
「・・・はい。」

アリスは言われたとおり棒を振り回したり、投げたりしている。

「さて、と。」

「・・・」

アリタはヨミに顔を移すと少し歯噛みしながらこう切り出した。

「「名前入力」でしたっけ。」

「そうですね。」

ヨミは少し遠くを見るような目でアリスを見つめていた、風に流れる髪を手で抑える。

「彼女はキャラ名を入力したんですね。」

「おそらく、は。」

二人の顔は暗いともつらいとも違う、不思議に満ちたような、悲しいような、それでもどこか悔しいようなそんな顔をした。

アドネイル事件、この事件の中で有名な噂があった。

初起動時の名前入力フォームに自分の名前以外の名前を入力するとその後、ゲーム世界に巻き込まれた時に実世界での記憶が失われてしまうというものだ。

全部失うものも居れば、自分のペットの名前といったような小さな記憶だけのものと様々である。

しかし、自分が実世界に居たという記憶を失ったプレイヤーには恐ろしい事態が起こったのである。

記憶を失ったまま放置するとキャラの周囲にエラーメッセージが出

現し、強制的にLostするのである。

エラーの出る時期は未だにつかめていないが、大戦争前の委員会の調べで、原因はプレイヤーの記憶にあるということが発見された。委員会の報告書では自分は実世界の人間だという事実を失うと、キャラクターのデータに何らかの負荷要素がかかり、プレイヤーはアドネイルの世界に存続できなくなるのではないかということだ。そして、対処方として挙げられたのは記憶の上書きである。

他のプレイヤーの手で、こちらと実世界を結びつかせる記憶をでっち上げることで擬似的にアドネイルというゲームをプレイしていると認識させるのである。

よく使われるものとしては、プレイヤー同士が実世界で知り合いだというのが簡単であった。

友達ということで一緒にプレイしていると思い込ませるのだ。

結果的に仲の良いプレイヤー同士ではかなり有効な手段であり、委員会も対処方として推奨していた。

もちろん、実際にそういう場合もあるので成功率も高い。

「ヨミ達も同じように？」

「・・・」

ヨミはアリスの方を見ながら考え事をしているようだ。

アリスは棒を頭の上に立ててバランスを取りながら、時折転んでしりもちをついていた。

クスツと笑い声を隠したヨミは、目を閉じながら話を切り出した。

「あの子は友達という概念がありませんでした。そして、家族、親戚、知人と呼ばれるものが居なかったのです。」

「・・・」

「実世界の記憶の中に知り合いという単語が存在していなかった。と考えるしかないですね。」

ヨミはため息に混じらせながらアリスとの出会いを語りだした。

アリタは話を聞くにつれ、自分の胸が引きつるような経験に囚われた。

そして一通り話し終えたヨミは水を少し飲むと笑顔をアリタに向けた。

「ほら、アリスが膨れてますから。一緒にトレーニングを致しましょう。」

「・・・そうですね。」

二人の見据えた先には今にも棒を折ろうかという剣幕でこちらを睨むアリスの姿であった。

「うゝゝもうつ!! わたし一人じゃ何のトレーニングが分からないよーっ!」

「申し訳ありません。」

「ごめんごめんアリス、今すぐ行くからね。」

さつきまでの重い空気は吹き飛んで、雲の間から覗き込む太陽の光が辺りをきらきらと輝かせる。

アリスは二人が来るとさつきまでのふくれっ面をころころとした笑顔に変えてあれやこれやと話を切り出した。

「ねえ、もう棒で遊ばなくてもいいよね? 飽きちゃいました。」

「そうですね、問題なく装備品を持てるようなので、本題に入りましょうか。」

「はい、わくわくするね。」
「ふふふ、大興奮ねアリス。」

アリタは木箱から様々な大きさの麻袋を取り出した。それぞれ封はされていたが、見た目でなんとなく中身が分かるようにでこぼこしていた。

「それでは、これから武器をお貸し致しますね。全部木製ですのでそれほど恐ろしいものではありません。安心してください。」

アリタの手がどんどん袋を開けてゆく。

アドネイルのプレイヤーキャラクターが装備できる武器は大きく分けて3種。

切断系、打撃系、遠隔系である。

ここからそれぞれの系統ごとに大きさの異なる武器が存在するが、有名なものを挙げるならばソード・ブレイド・メイス・ポール・ボウ・ガンの6種類である。

アリタはその中のソード・メイス・ボウに含まれる武器をそれぞれ目の前に置いた。

「たくさんあるんですねー。」
「なるほど。」

「さて、それじゃ好きなものを手にとってください。」

アリスは少し惑いながら木製メイスを手を取った。

「これはさつき遊んでた棒と同じような？」

「いいえ、そちら側は反対ですので下のほうを掴んでみてください。」

」

アリスはくいくいと角度を変えながら木製メイスを持ち替えた。そしてしっかりと掴むと目をぱちぱちしながら驚いた。

「なるほど！ こう持ってここで何かを叩くのね。」

「ご名答。少し待ってくださいね。」

アリタは木箱から太い木の棒を取り出すと、おもむろに地面に突き立てた。

「これを叩いてみてください。」

「はい。」

ぽじ。

ぽじ。

ぽじぽじ。

広場に頼り無い音が木霊した。

ヨミはほっぺを赤くしながら、手で口を覆い笑っている。

アリタも予期しなかった感覚に囚われ、その場で胸を抑えながらとろけたような顔をした。

「・・・これは・・・かわいらしいですね。」

「ええ、アリスはかわいいんです。」

にこりと笑うヨミ。

アリスは気に入ったのか、わーとかきゃーとか叫びながら木の棒を一生懸命叩いていた。

「ふふ、さて、気を取り直しましょう。ヨミはどの武器を使います

か？」

「そうですね、以前のアドネイルではソードの系統をよく使っていましたので……」

そう言うとなんと木製ソードを手を取った。

「質問したときに仰っていたとおりですね、よく似合っています。」

ヨミは木製ソードを手にとるとひゅんと一振りし、一呼吸置いてから肩まで振り上げた。右肩から左足の前にびゅんと振り下ろす。手首を返して腰を低く前に落とし逆の軌道で斜めに振り上げる。

一連の動きが終わると一度ソードを持ち直し、それを差し出しながらアリタを見つめた。

「やはりプレイしていたときは感覚が違いますね。」

「やはりそう思われますか。」

「そして、実世界で棒切れを振り回したような感覚とも何か違います。」

「そうですね。」

アリタはソードを受け取ると腰の位置で左から右に一閃した。鮮やかに流れた髪がピタツと静止したソードにはらりと絡む。

「具体的に言うと、体にかかる負荷の一部が欠如している。体の各部にかかる重みの感覚が実世界のそれとは異なっているといった具合でしょうか。」

「そんな感じです。」

まじめな話をする二人をじーっと眺めていたアリスはムスツとしたな

がらメイスを地面に突き立てて自分はそれにもたれるようにぐつと前かがみになる。

「また二人だけで話ししてる・・・」

ぼそぼそと独り言を言った後、辺りをきよろきよろするアリス。

「うーん・・・あ、何だろあれ！」

アリスが向かった先には木箱にたてかけられた大きな麻袋があった。

第9話：特訓とピクニック（後書き）

今回で10回目の投稿となりました。

度々読者数を見ると、新話上げるたびに10数名の方がすぐに読んでくださってるみたいでとても嬉しいです。

この場を借りてお礼をしたいと思います。

本当にありがとうございます。

どんどん慣れてきたので、一話ごとの長さがだんだん長くなってるような気がします。

内容は・・・実は把握しきれていません・・・。

こんな作者ですが末永く書いていきたいと思っています。
頑張ります。

第10話：昼下がりの閃光

「ううむ……。」

「あらまあ……。」

二人の見守る中、アリスはきゅーと唸りながら気を失っている。

原因は……

アリタはごそつとそばにあった大きな木製の剣を両手で抱えるように持ち上げた。

身長が一番高いアリタでさえ、その大剣を持つにはやや頼りないと言わざるを得ない。

ブレイドと呼ばれる大型の剣である。

通常のアドネイルでは巨人族が得意とする武器だ。

重量の規定が得意種族を限定するのである。種族ごとに決められた数値があり、それに見合った装備を持つと一定のボーナスが付与されるのだ。

もちろん装備できないわけではないので、他の種族も扱うことが可能である。

だが、事件後はそうも言ってられなかった。

以前は無かったもの……重量を感じるのである。

大きなものは重い、密度の濃い素材は重い、そして、保有するエネルギーの有無も重さの変化に色を付けるのだ。

「アリスっ、アリスっ。」

「アリス、大丈夫ですか？」

二人はアリスのそばに座りながら声をかけた。

アリスのおでこにはたんこぶができており、察するに・・・こういうことであろう。

剣を持ち上げたは良いが、重さに耐えられなかったため頭をぶつけて気を失ってしまったのだ。

「やはり、持ってこないほうが良かったですね・・・申し訳ありません。」

「いえ！ そんな誤られても・・・アリスを見てなかったのは私も同じですし・・・」

アリタは言葉を詰まらせたまま立ち上がった。
抱えられた大剣はまた木箱の元へと運ばれた。
地面に置くとずしんと響く。

太陽が真上まで昇り、少し傾こうかとしている。
大きな雲はのよりのゆりと一定方向に流れている。

ヨミは空を眺めながらぼーっと考えごとをしているようだ。

！！

ヨミの目が少し大きく開く。

「アリタさん良いこと思いつきました。」

「??？」

アリタは体と顔をヨミに向けてきよとした顔で先を促した。

「ふふふ」

微笑んだアリタは自分たちが持ってきた荷物を取りに立ち上がった。荷物の中から小さな敷物と布巾で包まれた四角い箱を取り出す。それらをアリスの近くに並べた。

「アリス、疲れたからお弁当にしましょ。」
「・・・!!」

ビクッと起き上がるアリス。
起き上がると同時に頭の痛みを思い出し涙目になりながら両手で頭を押さえた。

それを見たヨミは目をきゅっと細めてアリスに抱きついた。

「はぶっ!？」
「ふふ、この食いしん坊さん。」

アリタはどこか寂しげな表情をしながらその光景を微笑ましいと眺めていたのだった。

3人の姿を遠巻きに見ながら、丘の上ではもう一組の集まりがあった。

討伐隊の本隊の面々である。

人間族と翼人族5人の6人組。
それぞれ戦闘訓練を行っている、ある者はソードでペアの者と打ち合い、ある者は素振り、ある者は遠隔武器での射的を。
彼らも休憩を取ろうとしていた。

「アリタ・・・、裏切り者アリタ。」

「ああ、今回の作戦だってはじめは本隊を立候補したらしいぞ。」

「止めないか二人とも、気持ちは分かるが終わったことだ。」

「ふん」

二人揃って鼻を鳴らす。そして、遠くでにこやかにお弁当を食べるアリタを睨み付けていた。

「お前等・・・」

大柄な人間族のプレイヤーがため息をついた。

その横では3人が疲れ果てている体で仰向けに倒れこんでいる。

「なあ、ダシンさんよお。」

「作戦が終わるまではすまんがリーダーと呼んでくれ。」

「おっと、悪い。リーダー」

先ほどアリタを睨んでいた一人が、にやけながらダシンと呼ばれた人間族のプレイヤーに話しかけた。

「あんたはアリタの近くで働いていたんだろっ？」

「・・・。」

「なら、どうしてあのまま放っておいたんだ？」

「うむ・・・。」

ダシンは胸の位置で腕組をしたままぶつぶつと独り言を話していた。

「・・・アリタさん・・・一体何が・・・」

にやけている翼人族の青年はダシンの様子を見ながらやれやれと首を振った。

「よし、お前ら。今日も訓練終わったら酒盛りしようぜえ。」

「よっしゃー。」「おう!」「またですかぁ・・・」「へーい。」

「やれやれ、お前ら程々にな。また首長に怒られそうだな・・・。」

文句を言いながらも口元に笑顔を見せながらランスと呼ばれるポール系統の武器を担いだダシンであった。

彼ら討伐隊の本隊に与えられた作戦は、陽動された敵をいち早く殲滅し敵の戦力を削り取ること。今回の飛龍討伐作戦は単体のモンスターを相手にするのはなく、複数のモンスターを相手に戦うため、それぞれの役割は重要なものである。

本隊のメンバーに選ばれた彼らはこちらでの戦闘、つまりは事件後のアドネイルでの戦闘経験があり、なおかつ装備品や武器に対してある程度の知識があることで選ばれた。

しかし、白龍と戦うのは事件後初めてであるため緊張を拭えないといった様子であった。

「先輩・・・アルドラってやっぱりやばいんじゃないですか?？」

「今からそんなこと言ってどうするよ、以前は倒しただろう?」

「ゲームの中で、でしょう? 今と感覚の違う・・・。」

彼らは持っていた武器を脇に置いた。一人は遠隔系のボウを、そしてもう一人は汗を拭きつつハルバードと呼ばれる長い柄のついた斧。

そもそもアルドラ・・・アルフトドラゴとは。

この世界にはオークス大陸を中心に置き、円を書くように5つと離れて1つの大陸が存在している。そして、各大陸には特定の希少モンスターが生息していて、アルフトドラゴもその中に含まれる。

体長は中型船舶くらいだろうか、キャラクターを丸呑みにできるサイズの口と握りつぶせるくらいの前足、大木のような尻尾、そして空を覆い隠す巨大な翼を持っている。

それらを含めて全てが銀色にも似た白い鱗で覆われまばゆく輝く。そして、真っ白な体に降りかかる返り血を浴びた姿を見たものは戦慄を覚えるのだ。

「よお、隊長さんよお。」

「何だケイク。」

ケイクはにやけながらダシンに近づいた。

「あんた、アリタが世話焼いてる二人組知ってるか？」

「ん？ あの少女達の事か？」

ダシンは視線を移すと空になった弁当箱を名残惜しそうに見つめる。アリスと、もう堪らんと言わんばかりに頬を真っ赤にしたヨミが視界に入った。

「あの二人・・・流れ者だったか・・・」

「ヒツヒツヒ、お似合いだねえ、アリタにはっ。」

はき捨てるように言葉を投げたケイクは、金属製の武器を片手にずいずいと三人の方へと歩き出した。

「お、おい。」

ダシは止めようと追いつがるが、先にアリスがケイクを見つけて話しかけたのだ。

「こんにちは、本隊の人ですよ。」

「ええええ、貴方たち遊撃隊の協力が必要な本隊ですよ。」

明らかに嘲るような態度でアリスに答えた。

アリタ、そしてヨミは、ケイクをきつと睨み付ける。

ケイクはさも嬉しそうにへらへら笑い声を漏らした。

「おい！ ケイク、いい加減にしろ。」

「へっへっへ、良いじゃないですか。心配なんですよお僕あ。」

ケイクはアリタをじとつと見つめた。

「また、あ・ん・な ことになったら困りますからねえ。」

言い終わるとまたヒヒヒと笑いながら視線を外す。

カツとヨミが立ち上がるうとするが、アリタの手がさつとヨミの前に出される。

アリタの顔は申し訳なさそうにヨミを見つめた。

騒ぎを聞きつけたほかの本隊の連中もケイクの調子に合わせて笑い声を漏らしたりしている。

ケイクはさらに調子付きながら目を覆うしぐさをしながらヨミから離れる。

「ひゃゝ、怖いねゝ。飛龍を怖がって逃げる前に飛龍の方が先に逃げてしまいそうだな。ひゃっひゃっひゃ。」

「そりゃそうだ。」「怖え怖え。」「ひよゝ。」

「ケイク・・・お前らもいい加減にし・・・」

ダシンが止めに入る瞬間にアリスがケイク達の前に移動していた。

「おー嬢ちゃん。何だい？ お花畑にでも行こうってのかい？」

にやにやとアリスを見下ろすケイク、周りの連中も面白がって拍手をする者もいる。

アリスはじーっとケイクの顔を見ている。

ケイクは目を細め、にやりと口で笑みを作りながら首を傾げている。数秒の間があつた後に、アリスは一瞬俯いた。

そして、ケイクを見上げた顔はおそろしく綺麗な笑顔だった。

「っ？！」

「本隊の皆も怖いんだよね・・・でも、大丈夫。本隊の人が安心できるようにわたし、モンスターいーっばい倒すからね！」

改心の一笑。

瞬間世界が約5秒ほど停止した。

隊員達、そしてアリタは啞然としながらアリスの笑顔を見つめていた。

その沈黙を破つたのは隊長ダシンと何かのネジが吹っ飛んだヨミだった。

「だーっはっはっは！！ こいつは参った。俺たち形無しだ。」

豪快に腹を抱えながら笑うダシン。そして。

何やら聞き取ることでできない言葉を漏らしながらアリスを捕縛にかかるヨミ。

「わっわ!! 何々!!?」

急に抱きつかれたことと、隊長の大笑いでびっくりする。

ヨミはぐいぐいと頬擦りしながらアリスの頭をなでている。

そして、その光景を見ていた隊員たちもやがて苦そうな笑みを浮かべつつ、笑い出した。

しかし、ケイクは手をぐつと握り締めていた。

「く・・・こいつ・・・。」

ケイクは歯を剥き出しにして唸った、誰も見てはいなかった。

一瞬、目が少し開いたような気がした。どうやら何かを思いついたらしい。

ケイクは手を広げながらアリスを囲む中に割って入っていった。

「やれやれ、嬢ちゃんには敵わないね。参った参った。ヒッヒッヒ。」

さらにヒヒヒと笑いながら今度はアリスの前に歩いて行き、木製のソードを近くに置いた。

何をするのかとみんなが見守る中、自分も木製のこちらは棒を取り出した。

「よう嬢ちゃん、どうせなら一緒に訓練しないか? 色々と教えてやるよ。」

「ほんとに?!」

アリスは驚いたように声を出すと、やるやると言いながら木製のソードを手を取った。
逆さである。

「おいっ！！ いきなり何を言い出すんだケイク！ 止める！」
「アリス！ 私たちが一緒にするから止めましょう！」

ケイクはにやけながら二人に向かって言った。

「へへへ、嬢ちゃんの相手がしたいんだよ。それに、ふ、あの持ち方を見るよ。こりや教えてやらんといかんだろっ？」

ケイクはアリスに向き直ると、いきなりアリスの頭に向かって棒を振り下ろした。

「おい！！！」
「アリス！！！」

アリスは何か何やら分からないままにバコつと一発叩かれた、そして一瞬ふらつとした後、こてんとその場に倒れこんだのだった。
ヨミとアリタは意表をつかれて戸惑っていたが、すぐにアリスの元に駆け寄った。

「へっへっへ、ひゃーっはっはっは。駄目だなこりや、こりやモンスター一匹倒せないぜ。」
「ケイク！」

ダシンはがしつとケイクを取り押さえると、その場でアリタ達に向かって誤りだした。

「すまない！こいつは変な奴なんです、後でしっかりお灸を据えておきます。どうか許してやってください。」

必死に誤るダシン、そしてそれでも笑うのを止めないケイク。

「あなた・・・許しませんよ！」

ヨミはケイクを睨みつけた、そして、アリスの持っていた剣を取ろうとしたとき・・・

「いたたた、いきなりはびっくりだよ。でも、確かにこのままじゃモンスター倒せないね。」

アリスは頭を抑えながら起き上がった。

「アリス！大丈夫アリス？」

「大丈夫ですか？　どこか変なところ無いですか？」

アリスは起き上がるとまだフラフラとしながらケイクの方に向き合った。

そして剣を正規の持ち方に構えなおす。

「アリス、駄目！　じつとしてなきや駄目！！」

ヨミの静止も聞かずに何かに引き寄せられるように棒を持ったケイクに向かって歩き出す。

・・・あれ・・・？

何か違和感があったように剣を見つめるアリス、そのままその剣を

両手でしっかりと握り締めた。

ヨミが立ち上がり、追いかけてよとしたそのとき

「ひゃっひゃー、嬢ちゃんやる気満載じゃねえかー!!」

大声を上げながらケイクはダシンの手を振り切った。

そして二の句も置かずに棒を片手にアリスに飛び掛ったのだ。

「やめろ!!」

「アリス!!」

「ひゃっはあ!!」

二人の声が重なった瞬間にアリスとケイクの間合いが詰められ、ビュオンを振り下ろされた棒がアリスのシルエットと重なったように見えた。

「なんだと!?!」

「こ、これは!!!!」

.....

ヨミが手で作った目隠しを恐る恐る外す。

すでに涙が出始め、頬が紅潮している。

しかし、ヨミが見たのは意外な光景だった。

お腹を抑えながら横向きで倒れているケイクと、手当てをしようと駆け寄っているアリタとダシン。

そして、片手にソードを持ちながらぺたんと座り込んで空を眺めているアリスの後姿であった。

第11話：ヨミの記憶

ここはアリタの家。

家主はテーブルの上で手を組みながら昼間のことを思い出していた。

・・・。

その瞬間ちょうど太陽の光が私の視界を奪った。

いや、正確には反射された光と言っべきであろうか。

翼人族の青年が持つ木製のメイスが今まさにアリスの小さな体に振り下ろされようとしたときだ。

一瞬、ほんの一瞬だが私は見た。

彼女の、アリスの微笑みを・・・。

アリスが体制を低く取った瞬間、脇からきらりと光が差し込み、アリスと青年を隠してしまった。

次に私が見たものは青年がお腹を押さえながら倒れている姿であった・・・。

青年は身動きが取れない様子で苦しそうにうめき声を上げている。その先には見慣れない姿・・・いや、見慣れていたはずの姿があった。

彼女は海を見つめていた、そして、気絶していた。

何も言わずにだらりと垂らした右手に木製のソードを持ちながら。

ヨミはアリスの様子を確かめに走り出していた。

私も行こうとしたが、明らかに青年の様子がおかしい。

これはただ事ではないと感じて、ダシンを呼びすぐに手当てを始め

たのだ。

「ぐ……ぐあは……が……」

ケイクの声が聞こえてきた。うめき声だ。痛み以外を無視したような悲痛な声が聞こえる。

骨に異常は無さそうだ。腫れて赤くなっていたが、重症と言う訳ではなさそうだ。

すぐに水をかけて冷やすと、悲鳴を上げたがすぐに落ち着いてきたようだった。

「ぐぐ……あの小娘……く……一体何を」

それだけ言うと青年は静かになり目を瞑ってしまった。

私も少し安心した。視線をダシンに移すと彼はアリスをじっと見つめていた。

そうだ、彼女は大丈夫だろうか。

私は急いで彼女の元に向かった。

ヨミの腕の中ですよすやと寝息を立てている。

「あ、アリタ。彼は、大丈夫ですか？」

「はい、軽い打撲です。今は落ち着いていますので。」

私はアリスの寝顔を見つめていた。彼女は一体何をしたのか、何が起こったのか。

心の中でつぶやかれた疑問は彼女の寝息とともにすこしずつ消えていく。

「アリスは・・・少し休めば大丈夫だと思います。」
「一体何があつたのでしょうか。」

ついに言葉になって出てきた。私はヨミならあるいとは思ひ視線はアリスから外さずに声だけで問いかけてみたのだ。

「・・・。」

ヨミは答えない。ふと視線を感じヨミの方を向いた。彼女は目が合うと、少し視線を落としながらこう言った。

「たぶん・・・。」と。

私はそれだけで十分であつた。

それはアリスとヨミが出会ったときの話を思い出したからである。頭の中でヨミの声が鮮明に再生されてゆく。

（3年前）

ちょうど大きな戦争が終わり、鬼人族達に追いやられたプレイヤーが各占有諸国に非難し始めたころでしょうか。

私は戦闘が怖くて救護班に所属していました。

いつも傷だらけの仲間を見ながら恐怖し、そして目の前でlostしていく人・・・。

それでもオークの侵略は止むことなく逃げ惑う私達を執拗に追いかけてくる。

ある日、ついに船を手に入れることができた私達は、急いで大陸から離れようと海へと進んだのです。真つ暗闇の中を背後から迫るオークの気配に怯えながら。

そして船に付いた私達が見たものは、あまりにも残酷な運命でした。オークによって占領された船、私達を待っていた船員NPCやプレイヤーは、すでにオークの手によって皆殺しにされていたのです。待っていたかのように仲間のオークが私達を取り囲み、逃げ場を失いました。元々救護班だった私達に彼らオークに勝つすべなどありませんでした。

「いいか、一人でも逃げ延びて、そして、生き残るんだ。」

「全員で突破すれば一人くらい・・・」

私達は船とは逆の向きに走り出し、オークの集団の輪を破ろうと果敢に突進したのです。

咄嗟に反応したオークの矢が私の左に居た仲間を貫きました。

「が！」

彼の周りにみるみる赤いシステムメッセージがまわり付くのを後ろ目で見ました。

その後、シユンと消えてゆく・・・。

恐怖した私はそれ以降の自分の行動があやふやです。

涙を流しながら、あるいは叫んでいたのか、気でも狂いそうなほどに怖かったのです。

それなのに、皆の殺されていく姿、悲鳴、それらは鮮明に私の目が捉えてしまうのです。

オークに捕まり、目の前で剣を体内にねじ込まれてゆく・・・。

引き絞られた弓から、多数の矢が放たれたと思いきや、全身にハリネズミのように矢が刺さった仲間が次々と倒れてゆく。

そして、私のすぐ後ろにオークの気配を感じたとき、私はもう何も考えられなかった。

けれど、一番仲の良かった仲間が私を突き飛ばし、身代わりにオークに捕まりました。

こけてしまい後ずさりしながら離れようとする私に仲間は何かを叫ぼうと声を上げました。

「絶対に、生き残っ……」

その瞬間オーク口を塞がれた彼は、必死に暴れて逃れようとしていました。

しかし、両脇からオークが現れ、持っていた剣で彼の体を突き刺しました。

「にげ……ろ……」

彼の周りにも忌まわしい赤い文字が並び始め……そして……。

もう私に逃げる気力もありません。

オーク達の声が聞こえてきます。

意味も無く足元の砂を握り、自然と涙が私の手のひらに落ちました。見上げるとそばには大きな鈍器を担いだオークがいました。

私を見つめながらにやりと笑い、その鈍器を振り上げる。

「みんなの所に行きます。許してください。」

鈍器を見つめながら、私はぼそぼそとそう言いました。

そして、巨大な塊が私の頭を覆い隠すように振り下ろされた。

・・・。

しかし・・・

いつまで待っても痛みを感じませんでした。

あるいは、痛みを感じぬまま皆の居るであろう空間に飛ばされたのかと思いました。

がああーっ！！！！

私の沈降をかき消すようにオークの怒号が響き、驚いた私はアドネイルの世界を再びこの視界に入れることになった。

だが、私の思い描いていた世界はある者の手によって少し歪められたものになっていました。

「え、ええ！？　なぜ？　これは・・・。」

私が見たものは地面に突っ伏してピクリとも動かないオーク達の姿でした。

最後に私が見たオークもその腕を肩の辺りで切り裂かれ、私を捉えようとしていた巨大な鈍器も静かに地面にくぼみを作っていました。辺りを見回すと同じように動かないオーク達。

15体はいたであろうオーク達は私が少し目を離した隙に殺されていたのです。

そして、ついにその主が私の前に現れました。

あのとときの感動というか、戦慄というか・・・とても印象深くそして強烈なイメージは今でも私の心を支配しています。

目の前に現れたのは少女でした。

真っ白であっただろうワンピースはオークの返り血を浴びて、まるで炎を模したような豪快なタッチで染め上げられていました。

そして右手には今まで見たことも無い剣を握り締めていました。

ここまで大きな剣はこのゲーム内でもよほど重はずなのに、彼女はそれをさもそれが自然だと言わんばかりに握り締めていました。剣にも同じようにオークの返り血、そして、刃の腹にこびりついた肉片がずつとずり落ちる。

雲が晴れ、月の光が辺りを照らしました。

彼女の顔がすーっと輪郭を帯びながら、私の脳裏に焼きついていきました。

濃い黄金色の髪の毛、そして他の何よりも真っ赤なそして強い意識の込められた瞳が映し出されました。

彼女は振り返ると私のそばに寄ってきます。

恐怖です。オークよりもはつきりとした恐怖。

そして、絶対的な無力。抵抗なんて言葉は頭に存在しないかのように絶対服従。

痺れるような感覚と、もう何もかも全てを明け渡したような錯覚につつまれ、私はいつの間にか泣いていました。

涙が自然に目から溢れてくる。しかしなぜだろうか、まったく変な気持ちでした。

彼女が近づくにつれ、恐怖心と同時に悲哀の感情が強く、強くなっていたのです。

何を思ったか私は両手を前にあげ、彼女を自分の所へと迎えようと

全身で彼女の存在を求めました。

すると、当たり前のように彼女がその腕の中に入って来ました。目を閉じながらふわりと私の胸に落ちてくる彼女を私はしっかりと迎え入れました。

すると、彼女の纏っていた空気が変わりました。

剣は柄の辺りから砂のように消え去り、髪の色から光が消えていきました。

記憶はそこで少し飛んでしまいました。

そして、気づいた時には日が高く上り、何も無い浜辺に私と真っ白なワンピースに身を包んだ小さな女の子が私に寄り添いながら眠っていました。

「あ、あの。 大丈夫？ 怪我はしてない？」

私の胸のなかで寝息を立てる彼女はふみやふみやと何か話したようですが、すぐにゆっくりと寝息を立ててしまいます。

その顔を見ると、昨夜の記憶がぐぐぐと消えてしまいそうになりました。

あまりにも愛おしい笑顔が私の中の狂ったリズムを半ば強制的に変更していきました。

「・・・ありがとう。」

私も疲れていたのか同じように目を閉じて一緒に寝ることにしました。

・・・。

彼女が目を覚めました。ぐいつと伸びをしたら、先に目覚めていた私の顔をじーっと見つめてきました。

もうすぐ鼻がくつつくかもしれないという距離で、じーっと見つめてくる赤い瞳。

その後、くんくんと私の匂いを嗅いでいるようでした。

首元から胸、お腹の辺り。

満足したのかお顔が私の前に戻ってきたかと思うとぺろりと私の頬を舐めて、にこりと笑いました。

「わっわ、なんですか!？」

「うーー!。あうううあ?」

分かりませんでした。彼女は確かに何かを話したのですが意味が捉えられなかったのです。

そこで、持っていたオーブを彼女に渡しました。
これで問題なく会話ができるはずです。

「あなたはだーれ? わたしのお母さん?」

一瞬何かの聞き間違いかとも思いましたが、落ち着いて冷静に答えました。

「違います。私はヨミ、あなたに助けられたんです。」

彼女はくいつと首を傾けながらどうして?っと言うような顔で私を見つめてきました。

「夜にオーブに襲われていた私を助けてくれたでしょ?」

「んん? オーブ? 助ける?」

彼女はとことん分らないといった様子でした。

「あなたのお名前は？」

「アリス」

アリスと名乗った彼女はまた笑顔を作りました。

そのたびに昨夜のことを忘れてしまいそうになる、私は気持ちにく
つと杭を打ち込みながら切り出しました。

「ほんとうにありがとう。アリスさんは命の恩人です。」

「んん?!」

アリスは困ったような顔をして答えました。

「ヨミ? ヨミを助けた? わたしが?」

私もさすがに変だなと思い、昨夜のことを見たままの記憶を話した
のです。

ところが・・・。

「んーん、覚えてない。それにここがどこかも知らない。」

「!?!?」

私は委員会の発表を思い出していた。
記憶喪失についての事項であった。

第12話：アリスとヨミと海

彼女は現実世界の記憶がまったく無かったのです。

名前入力画面で本名を入れずにキャラの名前を入力するとこの症状が出る。

昨夜に起こった惨劇はゲームのシステムのせいか、綺麗に消えていました。

この辺りがゲームであることをアドネイルは私に教えてくれているような気がした。

彼女は今ものんびりと空を眺めながら時折私の方を向いてはにこにこ笑顔を投げつけてくる。

素直な愛情を直球で投げつけられてはこちらも笑顔に成らざるを得ない。

私はどうしようかと考え事をしていました。

昨日脱出に使おうとしていた船は、どうやら壊れていないようでした。

またオーク達が来るかもしれないし、早くここから離れたほうが良いと思った。

しかし、彼女は どうでしょう？

どこからどうみてもどうしようもなくお姫様に見えるけれど・・・昨日の惨劇は私の記憶の中の彼女の存在であつたし、得体の知れない存在であることは確かなのですが・・・。

「ヨミ、ヨミ。」

「何でしょう？ アリスさん」

「アリスさんはやめてよ、さんはつけなくていいからアリスって呼

んで。」

「はい、分かりまし」

「それに！そんな感じじゃなくて・・・もっと仲良しな感じで」

「ん？・・・えと、そ、それじゃあ、アリスがそう言うなら」

アリスはにこつと笑うと傍によってきました。

私の体に抱きつくと、ぎゅーっとしながら顔をこしこしとこすってきます。

「わー、温かいね。仲良し仲良し。」

「・・・。」

私はきつと笑っていたでしょう。

頭の中で大きな割合を占めていた昨日の出来事は、今のこの子からは何も感じられないのです。私は気にしないことにしました。

彼女は敵ではありません。

彼女の言っている通り、仲良しなのですから。

「アリス、ここは少し危ないところだから船で別のところへ行きましょう。」

「船？ あれが船？」

「そう、あれに乗って安全な場所に。」

アリスは興味深そうに船を見ていました。

私は積み込まれていた荷物に感慨を覚えつつも、私の視線を独占しようとは何これ何これと質問してくるアリスの声に助けられていました。

この船はあまり大きなものでは無く、最大でも8人搭乗できる程度の小船でした。

帆を張ると風を拾った船がゆつくりとすべるように進んでいきます。アリスは不思議そうに辺りを見つめながら、それでも楽しいといった様子できゃっきゃとはしゃいでいました。

「どこへ行くの？」

私は持っていた地図を床に広げると、アリスを手招きし、ここへと指を差しました。

そこはアルフエイト。占有5大陸の一つで私の種族が多く住む大陸。私の出身地登録はこの大陸のため、都合が良かったからです。

「アリスはどこから来たかは覚えてないの？」

「うーん、何がなんだかさっぱり分かんない。」

にまっと笑顔を作るアリス、私は少しあきれながらも色々と説明を始めました。

アリスの記憶喪失は酷いものでした。

現実世界の記憶が無いことは分かっていました、こちらに来てからの記憶も今まで私と一緒にいたことしか覚えていないと言います。

何かが頭の端に引っかかりつつも私は一生懸命説明を始めました。

この世界は……。

大陸の中には沢山の人に住んでいて……。

5種族と鬼人族……。

それからそれから……。

アリスは真剣に耳を傾けながらも、耐えられなくなるとこてんと眠

ってしまいました。

しかたないなと私の膝の上に頭を移動させて、上着を彼女にかけてあげました。

そのままゆっくりと時間は過ぎて行き、船の上での初めての夜を過ごしました。

次の日、アリスに揺さぶられて目を覚ましました。

彼女はお腹がすいたと自分の指をくわえながら少し元気の無い様子でした。

い・・・いけない・・・すつごく・・・可愛い・・・。

私の頭はどうしようもない焦燥にかられました。

今すぐこの子を抱きしめてもみくちゃにしてそれからそれから・・・。

とりあえず、考えを押さえ込んで朝ごはんの準備に取り掛かりました。

わくわくしながら待ってる彼女はそりやもう鼻血が出るくらい・・・。

ご飯を食べ終えた私達、もうすぐアルフェイトの領区に入ろうかというところでした。

日も高く風も安定していて、日が落ちる前にはアルフェイトにたどり着けると思っていました。

がしかし、どこまで行っても大陸が見えてこなかったのです。

アリスはただただ海を見ながらはしゃいでいたため、自分もいきなりの恐怖に負けることは無かったのですが、どんどん焦りはついつていきます。

本当におかしい、もう日が落ちようというのに大陸の気配がまったく感じられない。

アリスがお腹すいたと言いました。

そう、日が暮れて夜になったのです。まったくの予想外です。

そして星が見えてきたので私は星の位置から方角を確かめました。

そして・・・驚愕の事実が私の脳裏を横切ったのです。

アルフェイトとオークスを繋ぐ海には、とても大きなモンスターが生息していました。

その名はイフルアフラ。

こんな小船など丸呑みにしてしまうほどの巨大な蛇のようなモンスター。

そして、その巨大な体ゆえに辺り一帯の海流が変動し、目的の場所に着くことがなくなるのである。

今その巨大な蛇が近くに、もしかすると、自分の真下に潜んでいる。私は意気をのみ、彼女の寝顔を見つづどうするべきか悩んで悩んで、しかし何もできない絶望が私の体から力を全て奪い取ってしまいました。

イフルアフラ・・・私は以前のアドネイルでこのモンスターと対峙したことがありました。

船での移動中にいきなり真下から攻撃され、仲間皆lostし、私も薬を使わなければ逃げることができなかったでしょう。

そして、今はあの頃のととは違う・・・まったく違う感覚が私の恐怖心をさらに強いものに変えてゆきます。

「エミ？」

「！？」

私はハッとなりました。

いつの間にか涙が溢れ、腰が砕けて動けなくなっていたのです。アリスはそんな私を見ながらすぐく心配そうな顔をしています。

「大丈夫？ お腹でも痛いの？」

「え、ええ、ごめんなさい。少し・・・」

「少し寝ておくといいよ、もうすぐ着くんでしょ？ えっとアルフアイト？」

「・・・」

「アルフェイトだ、えへへ、間違えちゃった。」

「・・・ふふ、ふふふ。」

つられてしまったのでしょうか、少し恐怖心が消え落ち着くことができました。

アリスは用意していた晩御飯を食べながら私の顔を何度も何度も見えます。

心配かけてしまつて申し訳ないと思いつつも、恐怖を全て拭えたわけでもなく、力なくご飯を食べていました。

「うーん・・・」

「ごめんなさい、大丈夫だから気にしないで。」

「何かできることはないの？」

「・・・」

「悩んでいるならわたしも協力したいよ。」

「・・・うう。」

アリスは手を止めて私の手を握りました。とても温かく柔らかい手。

私は今まで塞き止めていた恐怖をじわじわとしかし溢れるように解き放ちました。

アリスも真剣に聞いているようでした。

そして、最後まで話し終える。

アリスは少し考えるそぶりをしながら、何かに気づいたように私に抱きついてきました。

「怖かったね、大丈夫だよ」

「アリス・・・」

「大丈夫だよ。そんなモンスターはわたしが倒しちゃうんだから。」

「・・・うん。」

私の脳裏によみがえる惨状、しかし、アリスはあのと時の記憶が無いという。

不安はいつまでもたつても消えることはありませんでしたが、彼女から伝わってくる温かさが震える気持ちを押さえ込んでくれていました。

少し落ち着いたことで私は対処法を探していました。

まだ何かできることがあるはずだと、過去に戦ったときの記憶を呼び起こしていました。

「ヨミ、ヨミー!!」

自分の意識から無理やり現実に戻ると指を指すアリスの姿が見えませんでした。

「何か見えるよ！ アレがアルファイト？」

確かに大陸のようなものが見えました。
しかし、アルフェイトとはどこか違う気がしました。
地図を開きます。

「ヨミ、何か動いてるよ？ アレ」
「・・・！！！」

開き始めた地図は見事に開ききったまま落ちてしまいました。
ここは海の境界、大陸と大陸を遮断する何かが変わる境界線。

アリスが見つけたものは海の端にある境界線でした。
そして、そこから先は・・・空洞になっている。
水が不思議な力で塞き止められ、向こう側には雲が見える。

船で近づくことはできるがそれ以上先には進むことができません。
しかし、これは少しだが希望が持てる展開でした。
この境界線はここがアルフェイトに近いということを私に教えてくれたのです。

すぐさま風を見切り、帆を張りなおします。
うまくいけばイフラに見つからないうちにアルフェイトに着くことができるかもしれない。

「アリスもうすぐよ、もうすぐアルフェイトに着くわ！」
「ホント！ やったね、ヨミ。」

いつもにこにこしているアリスは私が喜んでいるのを見てさらに楽しくなったようでした。

そして、星空が辺りに出始めました。
私は運を天に任せるようにお祈りをし、横目でぐっすりと眠ってい

るアリスを見守っていました。
やがて、自分の意識も少しずつ遠くなりいつの間にか眠ってしまいました。

「・・・ヨミ・・・」

「アリス？」

「・・・ヨミ・・・助けて・・・」

「アリス！」

私は無理やり意識を戻すと、今まで自分が眠っていたことに気づきました。

「・・・ゆ、夢か・・・」

横に眠っているアリスに視線を移す。

アリスはまだ眠っているようでした。しかし・・・何か様子がおかしいのです。

何かに怯えるように体をぎゅっと縮めていました。

「アリス？ アリス、大丈夫？？」

私は彼女の体を揺すってみました。そして・・・。

「ふあっ！？」

彼女の周りに赤いシステムメッセージが出ていたのです。

焦りました。一瞬気が触れたように彼女を揺さぶりましたが彼女は起きません。

しかたなく頬を打つ。

彼女はビクンと電流が走ったように目覚めました。が、彼女の瞳が

ら赤い光が消えていました。

「いけない！」

私は急いで彼女の視線に自分を合わせて、話を切り出しました。

「アリス、よく聞いて。私達はきっと現実世界で仲良かった友達だ
と思うの。」

「・・・」

「アリスが覚えていないから、確認は取れないけれど・・・この話
し方はよく知ってるような気がするの！」

「・・・」

「アリス、今は思い出さなくてもいい。でも、私達は友達なの。こ
こじゃなく、現実の世界で。」

「現実の・・・世界・・・」

「そうよ！現実の世界よ！」

「・・・」

「ここは現実の世界じゃないの、私達はゲームをしているの！」

「ゲーム・・・」

「私の現実世界の名前はクシヨミコト。覚えて無くてもいいのきつ
と私達は友達。」

「ヨミ・・・」

私は委員会の発表を思い出しながら何とか彼女の意識を取り戻そう
と声をかけていた。

「アリス、信じて。私は信じてる！アリス！」

「・・・」

アリスは目を閉じ、そして、ゆっくりと私の視線から外した。

「わたしに・・・友達はいない・・・」

「アリス!？」

「現実世界なんて知らない、ここでヨミに会った・・・」

「違うの! アリス、違うの!」

「ここでヨミと仲良しになった。」

「それはそうだけど・・・違うの! 私達は現実世界でも・・・」

「分からない・・・知らない・・・」

「アリス!！」

アリスの瞳から全ての光が消えた。ただぼーっと立ち尽くしている。

「アリス!! アリスー!!」

何度呼びかけても返事は無く、システムメッセージがカウントを進めてゆく。

私は今までのアリスとの会話を思い出しながらキーワードを探しました!

「・・・アリス!　なんで、それじゃなんではじめにお母さんって言ったの?!」

「・・・。」

「私をお母さんと間違えたんでしょ?」

「・・・」

「お母さんはこの世界には居ないよ?　アリス、貴方のお母さんは現実世界で貴方を待っているわ!」

「・・・」

アリスは意識を戻さない、カウントが続く。

「答えてアリス！　なんでお母さんって言ったの！」

「お母さんは居ない・・・覚えてない・・・お母さんが欲しかった・・・」

「そ・・・そんな・・・」

私は体の力が抜けていくのを必死に堪えながら、彼女を助けるため声をかけ続けました。

「アリスさんって呼んだら怒ったよね？」

「・・・」

「仲良くしたいって言った！」

「・・・」

「きつとあなたは感じ取ったの。私が現実世界の友達だと気づいたのよ！」

「違う・・・」

「違うわない！　信じて、私はアリスの友達だから！　大切な友達なのよ！」

「違う・・・ここで友達になってくれた。初めての友達になってくれた。」

「アリス！」

その通りだった・・・簡単に信じてくれないことは分かっていた。それでもあきらめたく無かったのです。

でも・・・彼女の周りのカウンターはもうすでに・・・。

「ああ・・・アリス！！」

「ヨミ・・・」

彼女の手が私に伸びる・・・。

私はもう体に力が入らない・・・。

彼女が私の頭に触れ、私の頭を撫でてくれた。

「やだ・・・いやだ・・・消えないで・・・。」

「・・・。」

「アリスー!!!」

ゴゴゴツゴゴオオゴゴツゴゴゴゴ・・・。

船が急に揺れだした・・・そう・・・。私は完全に忘れていたのです。

イフルアフラ・・・もっとも恐れていた恐怖の存在を。

私の叫び声に答えるように、大蛇はその姿を私達の前に現した。

大きな体は見上げててもその全てを見ることはできません。

ぐぐぐと体をくねらせ、私達の姿をその視界に入れた大蛇は大きな口から舌をすすつと出すと私達を獲物として認識したようです。

強烈な殺気が私達を包んだかのようにうでした。

すでに力の抜けた私や、今にも消えてしまいそうになったアリスにはその殺気はなにも無いかのように通り過ぎました。

「・・・いい時に出てきてくれた・・・。」

私はどうせアリスを助けられないのなら・・・。

「さあ・・・私を殺して・・・アリスと一緒に連れて行って、どこか分からないところへ・・・。」

もう、諦めていました。何もかもを・・・。

つい最近にも感じたこの開放感。私は何かに酔ったように立ち上がり、すでにlostの文字が滲み出始めた彼女のシステムメッセージを越え、彼女の体に触れました。

「アリス・・・」

「・・・」

なにも答えない彼女はただ大蛇を見上げていました。

私はその視線に覆いかぶさるように蛇に背中を向け、彼女の前に立ちはだかりました。

「あなたが消えたら、私もきつとそっちに行けるわ。」

「・・・。」

「友達でも・・・お母さんでもいい・・・」

「・・・」

「あなたの望む大切な存在になってあげるね。」

私は彼女を抱きしめた。温かさが消えてしまった彼女の体はすごく小さく、彼女の顔は輝きを失っても愛らしく、そして守ってあげたくなりました。

「アリス・・・貴方と私は・・・いつまでも一諸ごっ！！！」

何かが私の背中を押しました。そこから何か温かいものがはじけるような感覚・・・。

振り返ったそこにはイフルアフラのキバが突き刺さっていました。私にくい込んだ青白いキバ・・・イフラの持つ猛毒のキバです。

力が入りません、でもアリスには手を出させません。

キバはほとんど私の体を貫き・・・そして、それは前から見えるように私の胸から出てきました。

アリスは身長が低かったので、それが刺さることはありませんでしたが・・・。

彼女の視線が私の胸に気づいたことを目の光が教えてくれました。

「ヨミ・・・！！！！」

「アリ・・・ス・・・」

私は泣きそうになってくる彼女を見つめながら少し気が楽になり、ガクリとその場に崩れました。

キバが後ろに引き抜かれ・・・私の体から暖かな何かが飛び出しました。

アリスが・・・赤く染まる。

「あ・・・あ・・・あ。」

彼女の声は私の耳に届いてきます。

それでもシステムメッセージが消えることはありませんでした。

私は私を見上げてくる彼女を見つめていました。涙ぐむ瞳と震える唇。

何かが私の中で切れました。力が一気に抜けてきました。

「ヨ！　むぐ！！」

私は彼女の唇に自分の唇を重ねました。半分倒れかかったのでそこにアリスの顔があり、偶然だったのでしょね。

それでも、何か安心できる私は最後に思いつき彼女を抱きしめて唇を離しませんでした。

そして・・・。

「ごめんね、アリス。でも、これで友達よりも大切な人になった．．．よね．．．」

そこからの記憶はありません．．．。アリスの叫び声が私の覚えて
いる最後の記憶です．．．。

そして気づいた時、私とアリスはアルフェイトの海岸にうちあげら
れていました。

アリスが無事であったことや、自分の傷が治っていたので、初めは
ここがLostした先の世界と思ったのですが．．．懐かしい風の
香りがここがアルフェイトであると告げてくれたようでした。

一体何が起こったかはわかりません、ただ無事であったことやアリ
スが何事も無く私のそばに居てくれたこと。
それだけで嬉しかった。

そして私達はアルフェイトと一緒に暮らすことにしました。

アリスは前以上に私のそばにいるような感じですがそれはそれで心
地が良いのですよ。

．．．そう言つてヨミの話は終わった。

ヨミとアリスの出会いが私の想像を絶するものであったが、それは
私の中に彼女達により興味を持ちたいと思うことに拍車をかけたの
だ。

出かける際に放り投げた手帳．．．。

私は手にとって、裏側の文字を読んだ。

「リウラーオーブ．．．」

オーブを守れという意味だ。

今ではもう忘れてしまったアドネイルの公式設定．．．私はまた手
帳を読み始めたのだ。

第13話：馬で森で妖精で

朝日が昇り港に渡り鳥の声が響き始めた。

アリスは布団から顔を出しては、ヨミが睨んでいることを確認し、すぐに戻るを繰り返していた。昨日のことがあり、軽く怒られてしまっているのだ。

アリスはしっかりと誤ったのだが、心配性のヨミはことさらにどうして、なんでと繰り返して、しまいには泣き出してしまうから困ったものであった。

どうすればいいかと考えながら、またちらりと布団をめくり、ヨミの顔を伺う。

やはり怒った顔でこちらを睨んでいる。

アリスはまたひゅっと布団をかぶり、みーーーーーと泣き声を立てる。

・・・因みに、ヨミはすでに怒っていないのだ。

布団から出てきたり、またひゅっとウサギのように隠れてしまつアリスを

・・・かわいい、かわいい、どうしよう、かわいい・・・

と心の中で何度も反芻しながら出てくるたびに意地悪をしているのである。

そのうちにアリスが布団を全てめくってしまうと、溢れる涙を止めもしないでヨミに抱きついた。

「ごめんなさい。もうしませんー。許してー」。

アリスはひたすらにヨミをぎゅっと抱きしめながら誤り続ける。

「アリス・・・」

ヨミもあまりに可哀想になってきたため、もう意地悪するのをやめようと決めたようでした。

「分かったわ、アリス。許します。」

「ごめんなさいー。」

アリスはヨミの顔を見ながらそれでも涙は止めずに誤った。

ヨミも少し苦い笑顔を浮かべながら、泣きじゃくるアリスの頭を二度三度撫でた。

ヨミの趣味・・・もといアリスの可愛らしさを満喫したヨミは鼻歌交じりに出かける準備をしていました。

今日もトレーニングの予定だったのだが、昨日の件の後、アリタとヨミで話し合ったことがあった。

作戦場所の下見をするためにトレーニングを休み森へ行こうとアリタが提案したのだ。

もちろん、アリスの体調を考えてのことだろう。

そのことをヨミはアリスに伝えたのだが、アリス曰く

「やったー、森までお散歩するんだねー。」

と遠足気分になっているというわけだ。

ヨミは半ば呆れながらも、自分も少し楽しい気分になりつつあるこ

とにため息をついたのだった。

準備が終わると、二人はアリタと待ち合わせをしている街の入り口へと向かった。

今日は雲も少なく、ちょうどいいお散歩日和？になった。

森までの行き来は馬車を使い、お昼を食べて戻ってくるという計画である。

これは余談になるが食べれそうな食材があれば取りたいとのことだ。もちろん発案者はやる気全開である。

街の入り口には馬車が一台止まっている。

馬一頭に小さな荷馬車を繋いだ簡素なものだ。

ヨミと一緒にゆっくり歩いていたアリスのだが、馬を見つけると急に走り出し、馬に体当たりを行った。

むぎゅつと首元に抱きつくと、そのまま頬擦りを始めたのだった。

馬も一瞬びっくりしたようだが、不思議なことにすぐにアリスのことが気に入ったのか鼻先を下げてアリスの匂いを嗅いでいるようだった。

アリスもされるがままに馬とじゃれあった。

アリタは積み込もうとしていた荷物をそのまま地面に落としてしまった。

「なんと・・・まあ・・・」

ヨミは落とされたものをずっと拾いながら、にこにこ笑っている。

「ヨミはあまり驚かないんですね。」

「ええ毎度のことですから。」

荷物を積みながら横目でアリタを見たヨミはすこし驚いた。
アリタの服装がこの前とがらりと変わっていたのである。

「あらあら、アリタはけっこうおしゃれさんだったのですね。」

「・・・まあ、気分転換ということでしたしね。」

今日は昨日と違い、動きやすさよりもゆったりとした感じが伺えた。
長いスカートは足をふわりと隠し、少し厚手のカーディガンを真
っ白なシャツの上から着ている。首元には植物で作られたような
重のネックレスが垂れている。

「ちょっと、なよなよし過ぎでしょうか？」

「いいえ、かなり似合っていますよ。今日の私達に良く合うコーデ
イネイトですね。」

そういったヨミも同じように落ち着いた薄茶色のドレスと首からは
日が透き通るスカーフを下げている。森に行くのにはちょっと危な
げな感じだが、ヨミの着こなしが良いのか動きずらそうには見えな
かった。

アリスはいつもと変わらない真っ白のワンピース。今日は上着を付
けている。

「さて、アリスのことですから操縦すると言っでしょうが・・・構
いませんか？」

「おや、馬に乗れるのですか？」

「ええ、大丈夫ですよ。」

振り返ると、アリスはすでに馬に跨りながら遠くをじっと見つめて
いた。

アリタはにこりと笑うとヨミを支えながら馬車に乗せた。

そして、自分もさつと馬車に乗り込む。

「ねえ、森ってあっちだよな？」

アリスは太陽が昇ってきた方角を指差しながら、アリタに尋ねた。

「はい、そっちにまっすぐ行けば森に着きますよ。」

「はい、それじゃ出発してもいい？」

「どうぞ。」

「行きましょう。」

三人はすうーっと晴れた大空の下を軽快に出発したのだった。

「そういえばアリスは・・・」

「んー？」

パカパカと道を進む馬車の上でアリタが声をかけた。

「森に住む妖精を見たことがありますか？」

「妖精？」

アリスが軽く振り返り、興味があると目で訴えた。

「はい、森には妖精が住んでいて、時折私達のようなプレイヤーの前に姿を現すんだそうです。」

「へー、それは会ったこと無い。今日行く森の中に住んでいるの？」

「私も何度も会ったわけではありませんが、この付近の森には住んでいるはずですよ。」

「わー、絶対会いたい！絶対会わなきゃ！」

アリスはとても嬉しそうに手綱を揺らした。
馬もアリスが嬉しそうだと感じ取り、少し声を上げながら歩みを進めた。

「アリタ、あまりアリスを誘惑しないでください。」

「おや、何か問題でもあるのですか？」

「会えなかったときアリスが悲しんじゃうじゃないですか。」

「いえいえ、会えたらそれで可愛いアリスの笑顔が見れそうですし……」

「し？」

「……会えないのならそれはそれで愛らしく悲しむアリスの顔が見れそうです……」

「……」

アリタは声を少し下げながらヨミの顔を見つめていた。

ヨミもじとーっとアリタの顔を見つめながら、口を開いた。

「……アリタ殿、お主も悪よのう……」

「……いえいえ、お代官様こそ……」

二人の間にやりとした笑みが交わされたことを被害者になるであろう本人はまったく気づかずに鼻歌を歌っていた。

少し進むと、道が二手に分かれていた。

右に曲がると山村イトに続くのだが、今日の目的地では無い。

しかし、アリスが緩やかに馬を止めた。

「どうしたの？ 森はこのまままっすぐ行くのよ？」

「何か匂いがするの」
「匂い？」

アリタは辺りを注意しながら鼻をひくひくとさせた。
ヨミもすーっと深呼吸をしたが二人ともなにも感じないといったように顔を見合わせる。

アリスはさっきから同じ方向をじっと見つめながら馬を止めていた。

「アリス、今日は森で妖精に会ったんじゃないの？」

ヨミはアリスの興味を引こうと、肩こしからアリスの顔を見つめた。

「うーん・・・気になるんだけど・・・妖精にも会いたい・・・」

アリスはうーんうーんと悩んでいたが、にこっと笑うと森の方に進路を取った。

「妖精さんに会いたいー。」
「ふふ」

ヨミは荷車の席に戻るとアリタに目配せをした。
アリタもふふと笑いながら馬の進む先を見つめた。

日がもうすぐ昼になることを告げている。
一行は無事に森につくと、馬車を目印の木のそばに泊めた。
三人はそれぞれ荷物を持ちながら森に入っていたのだった。

木漏れ日で十分に足場が分かる。
大きな木になると見上げても先が他の枝に阻まれて見えなくなつて

いる。

地面には時折盛り上がった根っこがあり、土はほとんど苔に覆われていた。

小鳥の声が木々の間を木霊し、小動物の声も混ざるようだ。

アリスはうきうきしながら奥に進んでゆく、幸いにここはそれほど大きな森ではないので、ヨミはそれほど心配してはいないようだった。

アリタも笑顔のままでアリスの後についていった。

「このまま行くと、アリスは妖精に会えない様な気がしてきましたね。」

「そうですね。ああ、元気だと妖精が怖がってしまうでしょうね。」

二人はニヤつと笑いながらアリスの背中を追っていましたが・・・急に止まったアリスにヨミがぶつかり、そのままアリタもぶつかってしまった。

アリスがびくともせず、前に前を凝視している。

二人はそろって後ろにしりもちをついた。

「あいたたた。」

「うううう。」

アリスはそんな二人に目もくれず、ただ一点をじっと見つめているようだった。

二人は顔を見合わせると静かにアリスの脇からその先を見つめた。

二人は絶句したのだった。

そこには青白く光る馬のような生き物がたたずんでいた。

ちょうど水場があり、小鳥がその生き物の背中に留まっている。

角のようなものが頭に生えており、その角は一段と白く光り輝いていた。

こちらに気づいていないかのように水を飲む。

「……あれは、ユニコーン？……」

「……いえ、確かこのアドネイルのユニコーンはこの大陸にはいないはずです……」

アリタは自分の記憶を頼りにヨミと同じく息を殺して話した。

「……あれはおそらく……何か精霊的なものなのでしょう……」

「

「……精霊……」

アドネイルには妖精や精霊、神などのように不可思議な存在がいる。稀にプレイヤーの前に現れ、特に何をするわけでもなく印象深い光景を見せたらすっと消えてしまうのだ。

このプログラミングをした人はあるいは本当に神ではないのかと、当時のアドネイルユーザーの間で噂になったぐらいである。

そして、どうやらそれらしき存在を目撃した三人がここにいる。

「……これは、妖精なんかより比べ物になりませんね……」

「……ええ、アリスも大喜びでしょう……」

二人はアリスの顔を見た。

そこにあったアリスの顔は感情を忘れた人形のようにでした。

二人は見入ってる見入つてるとクスクス笑った。

しかし、次の瞬間……

「・・・ちよつと！・・・」
「・・・待ってください・・・」

アリスはその生き物に向かってゆっくりと進みだしたのだ。
二人はその場でしゃがんだまま事の次第を伺った。
アリスの姿を確認した精霊はひゅつと気配を変えた。
背中に乗っていた小鳥が飛び立つ。

「害は無いですね??？」
「だ・・・大丈夫です・・・大丈夫・・・」

二人は慌てながらアリスの背中を見守る。

アリスは止まることなく精霊に近寄ってゆく。
精霊の方が少したじろいであるようだった。

「・・・わたしの名前はアリス、あなたのお名前はなに？」
「・・・」

精霊はアリスの瞳を見つめた。
アリスはまだ近づく。

「きゃ！」
「アリス！！！」

急に首を捻らせた精霊がその角でアリスの腕を軽く引っかいたよう
だ。

「ごめんね、びつくりさせちゃった？」

『・・・・・・』

二人は飛び出そうとしたが、アリスの言葉を聴きながらまた見守ることにした。

「名前はなんていうの？ 妖精さんですか？」

「・・・・」

精霊は角に付いた血とアリスの腕に滲む血を見つめていた。
アリスは少し痛みがあるのか腕を押さえている。

「う・・・・いたたた。」

アリスはその場でしゃがんでしまった。

「アリス！」

ヨミは我慢できずに体を浮かせたが、アリタが止めた。

「見て！ ヨミ。」

「え？ な！・・・・なんて・・・・」

アリスの腕を精霊が舐めていた。愛おしいという感情が辺りから伝わってくる。

これが精霊の言葉なのか？と波動を感じ取った二人は胸を押さえた。

「あはは、ありがとう。大丈夫よ。」

アリスはにこにこしながら精霊の顔を撫でていた。

「こ……こういうことってあるものなんですね……」

「……アリス……だからでしょうかね……」

二人は神々しいと言わざるを得ない状況に歓喜していた。

「ねえ、お名前は？ わたしはアリス。」

「……」

精霊はなにも言わずにゆっくりと首を持ち上げると、そのままアリスから離れていった。

アリスは追わなかった。じつと背中を見つめながら一言……

「ばいばい、綺麗な角の妖精さん」

水辺にまた小鳥が戻ってきた、アリスたちもそつとその場から離れたのだった。

第14話：帰り道のイトで

アリスが明らかに意識を手放しつつあるため、ヨミがアリスを背負いながらアリタの後ろについて歩く。

「まさかお昼寝を習慣にされてるとは思いませんで・・・」

「いえいえ、本来ならここまで急では無いのです。ただ、妖精さんが相当嬉しかったみたいですネ。」

ヨミの背中に目をつつすらと開けたまま何かをむにやむにやと口ずさむアリスがいる。

ぐったりとしながら、ヨミの肩に顔をぽてつと預けている。

「アリス、もうちょっとだから頑張つてね。馬車まで行けばゆつくりできるから」

「・・・もそもそ・・・ぶつぶつ・・・」

「ま！ ふふ」

「何か？」

「ふふ、いえ、アリスが妖精さんとお話してるんですよ。」

「夢の中で？」

「ええ、今空を飛んでるみたいですネ。」

「なんとまあ、落とさないようにしなければいけないですね。」
「そうですね。」

二人とのつたりは昼下がりの森の中を戻っていた。

三人は精霊に会った。

神秘的な光景を見た二人とそれを体験した一人は精霊が去った後、長い間沈黙していた。

が、アリスが大声で

「わあ、妖精さんに会えた！ やったー！」

と叫んだため感慨に浸っていた二人はびっくりしてしりもちをついたのだった。

興奮したアリスはそこらじゅうを走り回っては、妖精、妖精とはしやいだため、アリタとヨミはため息混じり、苦笑い混じりで妖精との出会いを思い返していた。

アリタはヨミを連れて精霊が水あみをしていた池の辺まで来た。

二人で腰を下ろしながら、風景の中に溶け込むように静かにアリスを見守る。

アリスはそんな二人を見ながらも興奮が止められないのかどこかしらエネルギーを回りに発散させていた。

走り、飛び跳ね、くるくると回り、たまにじっと真上を見つめる。

真っ白なワンピースがアリスによってふわりふわりと動を得る。

その光景もまた神秘的だと思うヨミであった。

しばらくして、アリスが二人の所まですたと寄ってきた。

ヨミがアリスに向かって声をかけた。

「満足したみたいね、そろそろ・・・ん？」

アリスはじとーっと座っているヨミの膝を見つめている。

その目は少しうつろな感じで、頭がうつすらと揺れているようだった。

「あ、アリス！ ちょっと待って！！」

「も・・・だめー・・・」

ポテン・・・

「アリスったら」

アリスはヨミに抱きつくように倒れこむとそのまま膝を独占した。

「ヨミ、大丈夫ですか？ アリスはどこか調子が悪いとか？」

「いえ、これはその、お昼寝です。」

「お昼寝？」

「はしゃいだので疲れたんです。この子」

ヨミはにこにこしながらアリスの頭を撫でていた。

「アリス、ちょっと待って、馬車まで戻る？ね？」

「・・・うー・・・」

アリスはもぞもぞとしている。

しかたないなーとばかりにヨミはアリスを抱えると

「アリタ、少し手伝って。」

アリタにアリスを抱えてもらい、自分は背中を見せてしゃがみこむ。

「なるほど」

アリタはゆっくりアリスをヨミの背中に預けた。

「まったく、まあいつものことですけどね。」

ヨミはにこつと笑うとゆつくり立ち上がり、アリタを促した。

「先導お願いします。」

「はい、任せてください。」

三人はこの場所を後にしたのである。

馬車のところまで来ると、ヨミが流石にふうと息を吐いてアリタに苦笑いを見せた。

アリタは、もうすっかり眠り姫と化したアリスをゆつくり抱きかかえると、馬車に寝かせた。

このまま出発もできないため、自分達も少し休息をとることにした。

「いよいよ明日ですね。」

「ええ、流石にこのまま戦闘はできないかもしれないですが・・・」

「大丈夫です、アリスは今のままでもけっこうすばしいですから。」

「・・・」

「確かに・・・彼女はまだ飛龍と戦ったことはありません。」

ヨミはアリスの寝顔を見つめた。

寝息に合わせて小さな体を上下させている。

「どちらにしろ、このまま港も襲われてしまうのなら、手を打たなくとも同じことですし・・・」

「確かに・・・という理由であれ、飛龍達がイトを襲ったことには変わりありませんからね」

「・・・それなら、みんなと協力して戦える今、先手を取りたい・・・私はもう逃げるのは嫌なのです。」

「ヨミ・・・」

二人の表情は太陽が高く輝くこの天気の不釣合いに暗かった。雲がゆっくりと影を動かし、アリスの顔に日光を差し込ませた。

「・・・ん・・・ふわわあゝゝ」

「アリス、おはよう」

「おはようございます」

「おはよー、あれ？ もう夕方？ 寝すぎちゃったかな。」

「え？」

「まだそんなに経ってないですよ？」

二人はアリスの顔を見ながら不思議そうに眉を寄せている。

「だって・・・あれ？ 太陽が上にある？ それじゃあ、あの明かりは？」

「明かり？」

「??」

アリスの指差す方向に確かにオレンジ色のような明かりが辺りを照らしていた。

ちょうど山の陰に太陽が沈むように、しかし、その明かりは太陽のそれとは違っていた。

「!」

「あれは！」

「あの明かりは何だろ？」

ヨミはさっと荷物の中から地図を出し、アリタは馬を繋いでいた縄

を解き出発準備を整えている。

「あの方向はイトですよ」

「はい、ヨミ。確か陽動隊が明日の作戦の準備をしていたと聞いています。何かあったのかもしれませんが。」

「イト？」

「アリス、ごめんね。ちょっとお昼寝は先になりそうだね。」
「はい？」

ヨミは着ていたドレスを腰の辺りでベルトに固定し、持ってきていたズボン穿いた。

アリスには皮でできたジャケットを手渡すと、馬に跨りアリタに目配せをした。

「はい、大丈夫です。」

「イトに向かいます。」

「おー」

馬車は初めはゆっくりしかし、どんどんと加速してゆく。

荷馬車ではアリスがキャーキャーとはしゃいでいる。

アリタは荷物の中を整理しているようだ。

馬の限界速度で走り続ける馬車。

小石を踏むたびに大きく上下する。

アリスはびっくりしながらアリタに掴まっている。アリタも荷馬車の脇をしっかりと掴んでいる。

ヨミはスピードを落とすことなく道を戻っている。

そして・・・

ここはイトへと向かう分かれ道。

アリスが夕焼けと勘違いした明かりの正体が分かった。
どうやらイトの方で火事が発生しているようである。

「今朝ここを通ったとき、アリスが言ったのはこれのことだったのかしら・・・」

「んに？」

「ヨミ、ここで止めましょう。」

「はい。」

馬車を近くの木に止めると、三人は看板がイトを指す方向へと向かった。

進むごとに焦げ臭い匂いが強くなってくる。

そして、ちらほらとイトのNPCが道沿いに現れ始めた。
皆一様に脅えている。

「大丈夫？ 何があったの？」

「モンスターが・・・村を・・・」

アリスはほっかむりをつけたNPCの肩をとんとんと優しく叩いた。
ヨミとアリタも近くのNPCに声をかけながらイトへと向かってゆく。

「どうやら、飛龍がまた襲ってきたようですね。」

「そうみたいです、NPCさんは無事みたいですが。」

先を見るとイトの方角を見つめるNPCの姿が点々と見える。
どうやら逃げてきたようだ。

以前村が襲われたときにイトにいたプレイヤー達はほとんどが港に

移住しているため、ここにいるのはNPCばかりのはずである。

「ねえ、あれがイト？」

先行していたアリスが奥を指差している。

三人が向かう先には木でできた大きな門があった。半分が燃やされて黒く焦げている。

アリタはアリスを呼び止め、様子を見るためここで待つように言った。

「分かった。アリタ気をつけて！」

「はい。」

アリタは荷物からやや短めの金属製のソードを取り出し腰の鞘に収めた。

ヨミとアリスにもそれぞれ武器を渡すと、門の元へと走っていった。門の影から中を覗き見る。

イトの村・・・

20人も居ない小さな山村。

大きな建物といえば村長の家くらいで、それ以外は木造の小さな小屋ばかりである。

しかし、今のイトに見れるのは焼け焦げた小屋の残骸と焦げた大地。

「あれは！！」

アリタは見た。

小屋くらいの大きさはあろう大きなモンスター。どうやら倒された後らしくぴくりとも動かない。

頭くらいなら一口で食べてしまいそうな大きな口。

ごわごわとした黒っぽい皮。

プレイヤーくらいの太さの足が二本と、背には大きな翼が一对。

飛龍である。

「ワイバーン……」

アリタは門の裾からすつと飛び出すと飛龍の側で身を潜めた。
倒された飛龍の傷口に焼け焦げた跡を見つけた。

「これは……火薬の……」

アリタが飛龍の体に触ろうとした瞬間、前方から爆発音が聞こえた。
視線をくつと前に移す。

そこには今にも倒れこもうという飛龍の姿と、物陰に潜んでいる数
人のプレイヤーの姿があった。

「あれは……陽動隊の人達？」

アリタは辺りを警戒しながら進んだ。

アリタの見た飛龍以外にも5体の死体が転がっている。

すすつと身をかめながら進む。

そして、物陰のプレイヤーの顔が分かる位置まで来た。

アリタは息を殺しながら

「大丈夫ですか？」

尋ねた。返答は手でのサインであった。今のところ無事とのこと。

返答をしたのは集会場に集まった陽動隊のメンバーの一人であった。小さな体に大きな顔と瞳、小人族である。側には人間族の青年と大きな巨人族がいた。

アリタは辺りを気にしながらすばやく彼らのいる物陰に向かって走った。

「はあはあ・・・あの現状を教えてください」

「どうも、見ての通りですが我々が、、」

どうやら彼らが明日の作戦に備えて準備を行っていたところ、突然飛龍の群れが大空から現れ自分達を攻撃してきたというのだ。数は7、8頭を数えたらしい。

村人NPCと事情をしるプレイヤーは即座に非難し、同じ陽動隊のメンバーの残りは港に報告をしに行ったとのことだ。

そして、必死に準備していた道具を使い迎撃を行っていたのだった。

「まさか・・・」

「それは流石に無いとは思いますが、間違いなくこれで明日の作戦での準備は潰れてしまいました。」

小人族のプレイヤーは肩を落としながら暗い顔を伏せた。

アリタも同じように顔を曇らせていると人間族の青年がさっと手を挙げた。

「いました。まだこちらに気づいていません。」

見ると奥のほうにそつぽを見ながらじつとする飛龍の姿があった。
アリタは顔を引き締めその場で息を殺す。

「・・・連れがいるので一度戻ります。我々も手伝いをさせてください。」

「・・・」

小さな手でぐつと親指を立てた小人族。

横では巨人族が木箱の形の爆弾を抱えていた。

アリタは後ろからすすすのにじり出ると来たとき異常に回りを見ながら門へと向かったが・・・
そこに大きな衝撃が走った。

轟音が響き、アリタは前方に吹き飛ばされた。

「がっ!!」

地面に転がり数秒悶絶する。

事態を認識すべく首を上げる。

さっきまで小屋があった場所にはただの瓦礫があり、飛び散った破片とともに小人と巨人。

そして、奥に人間族の青年が吹き飛ばされて倒れている。

まだダメージは酷くないようだが、体を震わせている。

「く・・・はっ!!」

アリタの見つめる視線に大きな黒い影が飛び込んだ。
迷わず上を見つめた。

飛んでいた。飛龍だ。

そして、奥からはゆつくりとこちらに向かうもう一匹が口元で火をちらちらとさせている。

「ここまで賢いのか・・・」

陽動隊のの三人はなんとか立ち上がったが怪我をしているようだ。

青年は腰の剣を引き抜き、血だらけの左手をだらりと垂らしながら右手で構える。

巨人は這いずりながら手で上体を上に向ける。

そこに駆け寄り、持っていた回復アイテムを手渡す小人。

「時間を・・・稼ぎます！今のうちに形勢を！」

青年が叫んだ。

そこに飛龍の口から大きな火の玉が飛び込む、青年は必死に横つ飛びし回避する。

巨人も瓦礫の中から槍を取り出した。小人も脇から弓矢を構える。

アリタは走った。

このままでは危ない、ヨミ達に危険を知らせ加勢しないと思った。背中に轟音を感じながらまっすぐに走る。

門は見えている。

アリタは右足の痛みに気づき、調子を崩した足はもつれる。そのまま真正面に倒れる。

「ぐ・・・く」

アリタは地面を叩いた。

「こんなときに・・・くそ！」

アリタはぐつと立ち上がり、すぐそばに見えている門に向かって走る。

走る、気持ちは走る、しかし、足が言うことを聞かない。足を引きずりながら門に近づく。

「ヨミ！ アリスー！」

アリタは叫んだ、体を震わせながら声を飛ばす。

「聞こえた？ ヨミ！」

「はい！」

二人は隠れていた門の裾からさっと体を出した。声の主を探す。

「あれ！」

「フ！」

アリスの指先に片足を引きずり、こちらに向かうアリタの姿があった。

ヨミは走った。脇に抱えた荷物から回復アイテムを取り出していた。アリスもヨミを追って走る。

「アリタ！」

「アリター！」

アリタはぐつと顔をにこらせるとその場で倒れる。
ヨミはくつと齒を食いしばりさらに走る・・・が。

「！！！」

「あれは！？」

飛龍が滑空してくる。足についた鋭い爪がまっすぐにアリタを狙っている。

風の音が飛龍の翼によって切り裂かれる。

黒い影はどんと倒れているアリタに向かって大きく膨らんでゆく。

ぴりぴりと何かを感じながらヨミはカツ表情を固める。

走る足を間違えたかのように手でバランスを取る。

そして、最後の踏ん張りを聞かせアリタに向かって飛び込む。

「うううう・・・うーーーーー」。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

飛龍は舞い上がる。爪は地面をえぐり飛び散る小石が辺りに散らばる。

「アリタ！無事ですか！？」

「ヨミ・・・」

二人は助かった。

アリタに飛びついたヨミはそのままアリタと一緒に横に転がり、爪をぎりぎりで避けたのだ。

二人のすぐとなりの地面には、飛龍が鋭い痕跡を残していた。

「アリタ、立って！　また来ます逃げないと！」
「今はどこに」

二人は上空に居るであろう飛龍の行方を追った。
見当たらない。どこだ。

そして、視界に飛龍の尻尾を捕らえた二人。
しかし、その先に居たのは、

「アリスー！！」
「危ない！」

飛龍は次の獲物をアリスに定めたようだ。ゆっくりと高度を落とし、
アリスに向かってゆく！

ヨミは立ち上がるうとしたが、さっきの衝撃でうまく体が動かない！

「く！　アリスー！！」

ヨミは叫んだ、しかし、目の前には真っ白なワンピースに向かう大きな飛龍の翼が移る。

アリスはこっちと飛龍を見ながら、棒立ちになっている。
何も持たずにずっと顔を飛龍に向ける。

「アリス！」
「いやー！！　アリスー！！」

ヨミは顔を手で覆う。

アリタは体だけで上体を浮かしながらアリスに手を伸ばす。

飛龍の爪のシルエットがアリスの姿を隠す。

アリスはゆっくりと手を前に出している。
その場の空気が羽音でうねってゆく。

「じじじじ」……………

「アリス——————！！」

ヨミは涙を散らし叫んだ。

ガギン！！！！

「な！」

アリタは見た。

アリスの手には見たことも無い大きな剣だ握られ、その腹を飛龍の爪に当てながら斜めに構え、全身で飛龍を受け止めている。
その足は地面をずっと引きずりながら少し後退する。

「アリ……ス……」

手を外したヨミもその光景を垣間見た。

アリスは顔を伏せたまま腕をまっすぐに剣を支える。
バランスを崩した飛龍が不安定なまま地面に落ちる。
もがく。

「……………さない」

アリスの口元が動く。

アリタは周りの空気がぐつと変わるのを感じた。

アリスの周囲がぐらりと歪む。

「あの時と同じ・・・」

「ヨミ？」

アリタはヨミに尋ねたがヨミは酔ったようにアリスの姿を見つめる。
アリタも目を戻す。

アリス体がにわかに光を帯びていた。

髪に光が入り、茶色い髪の毛は濃い黄金の色に見える。

ワンピースの裾がふわりと舞う。

そして、飛龍が異変に気づきもぐくのを止め、視線をアリスに向ける。

それと同時に構えていた剣を持ち直すと、片手で地面に付ける。
ゆっくりとアリスの顔があがる。

閉じられた瞳がすーっと獲物を見定める。

真っ赤な瞳が飛龍を睨みつけた。

「ヨミに手を出したお前・・・」

飛龍が体制を戻しつつ立ち上がろうとしている。

アリスは一步一步飛龍に近づいてゆく。

飛龍は立ち上がった。

翼をいっばいに広げ、アリスに向かい大きな咆哮をあげる。

ヨミとアリタはぐつと耳を塞いだ。

咆哮の衝撃でアリスの髪や服は後ろに流れる。
咆哮が止む。

ぐるる・・・

飛龍が唸りながら、首を捻り大きな口を開けた。

ぐがあーーーーー！

「許さない！」

アリスの目がカツと開かれる。

右手で持っていた剣にすつと左手を沿え、そのまま真上に振り上げた。

そこには今にもアリスを噛み砕こうという飛龍の大顎。

がしゅ！

アリスの剣は飛龍の口を引き裂いた。

間髪入れずに剣が振り下ろされる。

頭の上に切っ先が重なった。

ガスッ！！

飛龍の首元まで真つ二つに割れる、噴出す血が雨のように降り注ぐ。
真つ赤に染められたワンピースと無造作に垂れた大剣。

アリスは崩れ落ちる飛龍をまだ、睨みつけていた。

第15話：集会所、ケイクの疑念

港町バリオトは大変な騒ぎになっていた。

陽動隊からの報告と、イトから戻ってきたアリス達と残っていた陽動隊の3人のためである。

集会所に本作戦に参加するプレイヤーが緊急招集され報告を聞いた。報告内容はこうである。

イトに飛来した飛龍の数は7頭、うち5頭は陽動隊が明日の作戦用に準備していた爆弾などを用いて討伐。

残りの二頭のうちの1頭を遊撃隊が、そして陽動隊が最後の1頭を討伐した。

よって、明日の計画に若干の変更を加えるとのこと。

集会所には本隊のメンバーも集まっており、ケイクは遊撃隊の名前が出た瞬間にぐっと眉を吊り上げたのだった。

「ケイク、遊撃隊も1頭。飛龍を倒したようだな。」
「・・・」

ダシンはケイクを見ながら少し怒りっぽく話しかけた。

「お前の怪我の具合を見るに、アリスっていう子、あの子はかなり強いんだろうな」

「あれは・・・まぐれとは言わねえが、変な感じがするんだよ」

ケイクはあの後、ダシンの忠告を聞き反省したがアリスの事に関してはあれは何かおかしいと不信感を募らせていた。

本隊の面々にもどうなった？見たか？などと声をかけるも皆一様に閃光が邪魔をしようと言っばかり。

「ケイクよ、お前まだ気にしてるみたいだが単純に鍛錬不足だと思わんのか？」

「馬鹿野郎！ 隊長だって見ただろ？！ あれは変だって本当に！」
「やれやれ」

ダシンは顔と手で呆れたことを表していたが、頭の中では確かにおかしいとは感じていた。

やがて集会所にアリタ、ヨミ、そして陽動隊のメンバーが集まる。だが、アリスの姿は見えなかった。

首長の質問に対しヨミの答えは単純であった。

「いい寝顔してましたから」

微笑むヨミと苦笑いのアリタ、その雰囲気は集会所を包み少し朗らかな空気に変えた。

ダシンはふむとため息をつき、ケイクは何か苦虫を噛んだような顔になっていた。

全員が揃ったところで首長を囲み会議が始まった。

皆が準備している間、首長とその付き人は敵の内情を探りに住処に偵察を行っていたと言っのだ。

しかし、首長がやや顔を曇らせておかしいのだと切り出した。

「かの飛龍は集団行動は滅多にしないため、その頭である白龍が指示をしていると考えていた訳だが・・・」

首長の声に集会所は少し沈黙を持って待つ。

「どこを探しても白龍の姿が見えず、しかし、寢床には明らかに複数の飛龍の痕跡があった。」

ざわざわと辺りがざわめいたが、首長は気にもせず話を続けた。

「とりあえず、住处に集まったであろう飛龍の数はおよそ15頭、もちろん最低数だからこれより減ることは無い。そして・・・」

イトの一件を考慮した結果、明日の作戦をどうするか・・・。

「目標となるのは飛龍だが、白龍の存在がやや懸念される。そのため目標を白龍および飛龍ということにする。」

首長が息を切る。

「飛龍はおよそ10頭と考えるべきだろう。もしも、白龍が元凶なら飛龍を討伐していけば出てくるはずである。」

皆一様に顔を陰しくさせながら首長の話を聞いた。

そして、陽動隊のメンバーからの報告やNPCから得た情報などを元に明日の作戦を立て直したのだった。

雲行きを見る限り明日は晴れ、作戦決行である。

場所はイトを南に下ったところにある平原に罠となる餌を設置し、飛龍を待つ。

今回のイトの事件はこの餌が問題だったのではという指摘があり、

効果は期待できるものとされた。

そして飛来した飛龍を倒していくわけだが・・・一気に来られたら流石に歯が立たないため、馬車と餌、さらに弓などの遠隔系武器を使い、飛龍が集団にならないよう散開させる。

これは主に陽動隊の仕事である。

イトの事件のため攻撃力のある爆弾等のアイテムが少なくなってしまうため、陽動隊は迎撃を控え、あくまで陽動を主任務にすることを決定した。

そして本隊。

本隊は散らばった飛龍を次々倒さなければいけない、アイテムが減少しているためより迅速な行動が求められるということだ。

ダシンは話を聞いた瞬間に隊員全体に号を飛ばし、隊員もそれに答えた。

そして、計画の進行に間違いが無いよう、遊撃隊に与えられた任務はそれぞれの部隊が円滑に作業できるための補佐である。

作戦全体を見渡し、問題点の解決。

下手をすればもっとも危険ではと思われる任務だが・・・アリタが困惑する中、陽動隊のメンバーが自信を持って推薦したのである。信じている・・・と。

ヨミも返すことなく、その場で目を瞑っていた。

大きな変更点といえば作戦に使われるはずだった火薬や爆弾などの殺傷兵器が少なくなってしまったこと、白龍の行動が分からないため、被害の種である飛龍を直接倒すこと、遊撃隊が本隊の補佐だけでなく陽動隊の援護も行うこと。

以上であつた。

それぞれ作戦指示をまとめながら各隊ごとに相談を始めていた。

「なあ、この前は本当にすまなかった。」

ケイクはふらりとアリタとヨミの座る席に現れた。

「・・・はい、もう大丈夫ですか？」

ヨミはケイクの顔をまともには見ていなかったが、アリスの一撃をもらったことには変わりないので一応心配をかけたようだ。

「あ、ああ、確かにひでえ痛みだったが、大丈夫この通りだ。」
「そうですか・・・」

ケイクは少し笑みを見せつつ、話を変えた。

「なあ、アリタさん」
「何でしょう？」

アリタが持っていたコップを机に置く。

「ええ、その飛龍を倒したのはあんただろ？」
「・・・」

確信を持って聞いたであろうケイクの一言は長い沈黙をもたらした。

「・・・違うのか・・・じゃあ、やっぱりあのお嬢ちゃんなんだな」
「・・・」

「あの子は何者なんだ？ 間違っても通常とは考えがたいんだが。」
ヨミが割って入ろうとしたが、アリタがすっと手を伸ばし止めた。
どうして？と顔で表しながらも引込む。

「“通常”というのはきつと事件後の事ですよね。」

「・・・うん？」

「貴方は事件前のアドネイルのプレイを覚えてらっしゃいますか？」

ケイクはぐつと頭を抑えながら、それでもよく分からないといった感じた。

「彼女、アリスの動きはたぶん事件前のプレイヤーの動きなんですよ。」

「・・・はあ？」

「つまり、彼女の中では今では当たり前になりつつある・・・」

アリタは席を立ち、近くにあつた椅子をこちらに持ってきた。

「体格差、重さ、年齢、そのような現状の日常を超越していた以前のアドネイル・・・」

アリタは椅子を持ち上げるとパツと放した。

「なっ!？」

ケイクは驚いた。そして様子を見ていた複数のプレイヤーがざわめく。

椅子が宙に浮いているのだ、しかもふわふわではなくそこに床があるかのように安定して。

「糸か・・・そこに糸が張ってある。」

すらりと伸びたアリタの手は壁から出ていた糸を掴んでいた。

たった一本の糸の上には片手ではすこし重たいと感ずるであろう椅子。

ケイクは少し考え、そして答えを出した。

「つまりは・・・あの嬢ちゃん俺らの感ずてるアドネイルとは違う感性でアドネイルの中にいるってことなんだな？」

「まあ、大きくは外れてないでしょう。しいて挙げるのなら、きっと彼女が普通なんです。アドネイルの世界では・・・」

ケイクはまだ何か考えていたが、やれやれといった風に手を上げた。

「ああ、分からん分からん。とりあえず、嬢ちゃんが居れば白龍なんてただのトカゲってことでいいんだな？」

アリタがキツとケイクを睨みつけたが、ヨミの平手打ちの方が早かった。

「つてえな！ 何しやる！」

「貴方にあの子の何が分かるんですか！」

ヨミは叩いた手を押さえながらケイクを半分涙の混じった目で見つめていた。

「な・・・」

と、そこに陽動隊のメンバー、小人族のプレイヤーが現れた。

「ケイクさん、あまり彼女のことは詮索しないほうがいい。」

「お前は？」

「私は、いやどうでもいいだろう・・・陽動隊のリーダーだ」

「あんたは嬢ちゃんのこと知っているのか？」

小人はすつと顔を落としながら、言葉をつないだ。

「ああ、その一部を見ることはあった。」

小人は先のイトでの出来事をかいつまんで話だした。

アリスが飛龍を切り裂いた後、何が起こったのか……。

……小人は驚くほどの光景を目にしたのだった……。

目の前には大きな肉体をことさらに強調し、見つけた憎き強敵に向かって咆哮を上げる飛龍。

そして、その声を聞きながらも必死に抵抗を続ける自分の部隊の隊員。

しかし、今はそんな危機感よりも興味が勝った。

自分の盾になってくれている大柄な巨人もその光景を見てまさに石壁のように止まってしまった。

飛龍の見つめる先には小さな少女が立っていたのだ。

そして、その少女がたった今……自分の十倍はあろうかという飛龍を倒したのだった。

目の前にすでに事切れたもう一匹の飛龍、それを嘲笑うかのように壮絶な笑みを浮かべながら次の目標に目を移している。

自分達の相手をしていた飛龍も仲間を殺されたことに怒り、こちらを見ずに少女に突進をかける。

ふん。……と少女が小さく鼻をならしたような気がした。

少女は自分の身長の一・二倍はあろうかという大きな剣を背負い、こちらから飛龍に向けて走り出したのだ。

そして、どんどん近づいてゆく非対称なシルエットが互いの距離を0にした瞬間・・・

大きく仰け反った飛龍の姿と後ろに吹き飛ばされる小さな赤い姿があった。

飛龍は目をやられたらしくその場でもがいている。

吹き飛んだ少女は倒れたままだ。

そこに隊員の青年が持っていた剣を大きく放り投げ、もがく飛龍にぶつけた。

こちらを向き咆哮を上げる飛龍。

自分は持っていた弓を構え、つぶれている眼に向かって何度も矢を撃った。

飛龍が悲痛そうな叫びを上げながら、こちらに向けてゆつくりと歩き出す。

そこにすかさず青年の渾身の一撃が入った。

見事な首元への一撃であった。

自分はその場でヘタリこんでしまった、今まで壁になっていた巨人の彼が持ち上げてくれなかったらそのまま寝ていたかもしれない。

吹き飛んだ少女の下へと歩いた。

もう一人の少女が看病しているようであった。

さっきまで持っていたあの巨大な剣はどこにいったのか、少女の元には無かった。

見覚えのある顔が眼に入り、軽く会釈をする。

アリタさんも同じく軽い笑みを浮かべたが、すぐに少女の元へと心配をかけるべく視線を移す。

少女の服はよく見ると赤色ではなく、飛龍の返り血で赤く染め上げられているようだった。
見事な赤い色だった。

もう一人の少女は泣きながら彼女の頬を触っている。
まさかあの一撃で死んでしまったのだろうか・・・それならloss
tの文字が出てくるはずだが・・・
少し心配をした瞬間にアリタさんが軽く肩を叩いた。

「アレはいつもの彼女では無いんだよ・・・彼女は特殊なんだ。」
アレというのはあの勇ましい大剣を持った姿の事であろう。
何かあるというのだろうか・・・。

看病していた彼女がずっと泣くのを止め、少女を抱き寄せそのまま
担ぎ上げる。
声をかけようと思ったがその背中には明らかに他を拒絶するオーラ
のようなものを感じた。
声を飲み込む。

その後彼らは馬車に乗り帰路についたようだ。
自分は村に転がっている機材を回収していた。
隊員達の手当ても行わないといけなかった。

しかしそんな中、大柄な彼が声をかけてきた。

「ちょっと来てくれ」

言われるままに付いていくと、彼女が飛龍とぶつかった場所へと案内された。

彼は地面を指差していた。

見てみると何か違和感があることに気づいた。

「これは・・・」

地面が焦げているような、何か高圧力のエネルギーが発せられたと思われる痕跡が残っていた。火薬というわけでもない。

そして、その一撃が間違いなく飛龍の顔に放たれたのだろう、血痕があたりに飛び散っていた。眼に焼きついていたあの瞬間・・・もう一度自分の中で再生されていた。

・・・小人は注がれた飲み物を口にし、ケイクの反応を待った。

ケイクは持っていたコップを震わせていた。

自分が受けたあの痛み、そして、飛龍をもたじろかせた少女の話・・・。

ずっと席を立つケイク。

ヨミはぱつと向きを変え、席に座りなおす。

その隣にアリタが座り、肩を叩く。

「大丈夫・・・明日の作戦、アリスのあの力は出させない。」

「アリタ・・・」

アリタはにこりと笑いかけたが、ヨミの顔は優れないままだった。

「・・・いい寝顔なんて・・・してない・・・」

ヨミはぽつぽつと言葉を出すと、机に突っ伏してしまった。

そう、アリスは今大変な状態に置かれていたのだ。

意識が戻っていなかったのである。

第16話：戦いの序曲、夢にて

「アリス、ちよつとアリスっ！」

温かみのある声が小部屋に響く。

淡いクリーム色の壁紙が天窓から差し込んだ光を受けて明るく光る。部屋の中にはパソコンが置かれている机と木製の本棚、そして部屋の中央にはリクライニングのできる大きな一人用の椅子のようなものが置かれている。

そして、その椅子に埋まるように人が座っていた。

椅子の中に埋まったっていた人は、声を聞くと一瞬びくつと動き何やらもぞもぞと動いた後、顔の上半分を覆っていたバイザーを外した。

声の主の姿が見えないが、アリスと呼ばれた少女はくつと顔を上げ声の方向に向けて返事を返す。

「はい。ここにいますー。」

「手紙が着てたわよー、テーブルに置いておくから」

「ありがとー、後で見とくー」

「いい加減にしとくのよー」

「分かってるー、この話終わったら切るよー」

まったくもう・・・と部屋に近づいた影は手を上げてため息をついた。少女もふうと言いながら、横に置いたバイザーを付け直した。

景色が変わり、バイザーの中の幻想世界が広がってゆく・・・。

・・・・・・アドオン。

「お待たせ、何でも無かった。」

「おかー、今落ちられるとちよっと困るから助かったよ。」

「その言い方もどうかと思うわ」

「わり、さっそく行こう」

「おっけー」

ここはオークス大陸。

アドネイルで毎月行われる種族間大陸争奪戦の戦場となっている。

6大陸＋で構成されるアドネイルの世界は、5種族の占有大陸が円のように並び中央に巨大なオークス大陸が置かれている。

マーケットや市場、多くの資材、情報、お金の集まるこの大陸はまさに貿易の中心なのだ。

そして、5つの占有大陸チームは毎月このオークス大陸の借用権利を得るため大規模な戦争を行う。

勝利した占有大陸チームが来月までこのオークス大陸での権利を得ることができる。

プレイヤーVSプレイヤーという荒々しいイベントではあるがオンラインゲームではありきたりな事であり、明確な勝利報酬が拍車をかけて大人気であった。

今、まさに戦争状態となっているオークス大陸の東側。

そこには大きな平原地帯が広がっており、よく戦場として利用されている。

現在、オーブが無事なのはマリアンとアルフの2チームであった。

マリアーナ大陸は人間族の多い大陸で、アルフェイトは翼人族の占有大陸であった。

アリスは前者、マリアンに所属する人間族のキャラクターである。

「先方はすでに配置についたらしいぜ。」

「そつ、じゃ私達も急がなきゃね。」

平野では大群が二手に別れ、旗を掲げながら睨みあっている。

海の側にはアルフの軍勢、平野の奥側にマリアンがそれぞれ整列している。

種族間戦争はある種のフラグ戦のようなモノ

互いのオーブをそれぞれの大将が持ち、奪われるか自軍の戦力が一定値減ると負けとなる。

キャラクターが死ぬと、そのキャラ毎に割り振られたオーブの加護の値分戦力ゲージが減るのだ。

主に部隊分けを行った時のリーダーには多くの加護が割り振られるため、頭を倒せばそれだけ早く勝負を決めることができるのだ。
が！

このオーブの加護はとても強固なもので、そうやすやすと加護を受けたキャラが倒されることはないのである。

「アリスは今回どこになったんだ？」

「第3部隊で・・・エースみたい」

「エースかぁ・・・相変わらず・・・」

「ふっふん」

エース、その名の通りその部隊で一番の称号である。

大将がもつとも大きな加護を得る、そしてその次がエースであった。部隊長という役割りもあるのだが、エースはそれと違って各部隊ごとに一人、または全軍合わせても一人か二人程度である。

割り振れる加護の容量は決まっているため、エースの数を増やせば

それだけ他のプレイヤーへ加護をまわせなくなるというわけだ。

「エクシリオンだっけ？ この前システムから許可がおりたの」

「うん、実際なんで許可貰えたのか知らないけれど・・・どうせだから使うよ。」

「一体全体どういうプレイングをすりやそうなるんだか。」

「ところ構わずサーチ、これよ！」

二人はボイスチャットを行いながら部隊の中心へ向かって歩いてゆく・・・。

そして、マリアンの軍勢の中に消えてしまふ。

両軍合わせて2000人、各々が所属する占有大陸の旗のもとに集い合図を待っている。

第3部隊の先頭では、アリスがエクシリオンを担ぎアルフの部隊を見つめている。

その目はまっすぐな光を放ち、彼女を見つめる他のプレイヤーに勇気を与えていた。

合戦の合図までどんどんカウントが落ちてゆく・・・。

すくっと頬を冷たい風がなぞった・・・

・・・アリス・・・

・・・アリス・・・アリス・・・

・・・起きて・・・アリス・・・

どこからともなく声が聞こえてくる。

アリスの眼光が少し緩やかになった瞬間・・・

辺りはまどろむように溶け出し、総勢200の軍勢は煙のように消えてゆく……

「アリス、大丈夫？」

「……誰……」

「アリス……良かった……」

大きなベッドの上には小さな少女とそれを見守るように肌着のままの女性が横たわっていた。

アリスはイトの事件以降昏睡状態となり、丸一日眠っていたのであった。

「ヨミ……ヨミイ!!」

「アリス、良かった、アリス」

二人は互いを確かめるように抱きしめあった。

アリスの目からはとめない涙があふれ出し、ヨミはずっと目を閉じながら、それでも離さないとばかりにしっかりとアリスを抱きしめた。

扉に背を預けながら、アリタが二人の様子を見ていた。

「……妬けますね」

ボソッとつぶやくと気配を殺したまま別の部屋に移動していった。

「変な夢を見たの」

「そう、怖い夢だったの？」

「んーん、なんだか分からないけれど、変な夢だった」

「私はアリスがずっと寝たままだから寂しかったわよ？」

「ごめんなさい」

かくつと肩を落とす。

小さな体はそれでもさらに小さくなったように見えた。

「アリス、アリスはちゃんと起きてくれた」

「・・・」

肩にそつと乗せられる手に、アリスは目を落とす。
暖かい手だと思った。そして、心地良いと思った。

「おはよう、アリス」

にこつと笑みを浮かべるヨミに、アリスも全力で答えた。

「おはよう！ ヨミ」

隣の部屋では玄関先にまとめられた荷物を眺めつつ、二人と自分のためにと入れた紅茶の香りに苦笑いと、悩み心の残る顔つきでアリタが座っていた。

荷物の中には今日の作戦で使われる支給品の数々とアリタの手持ちの武具が入っていた。

一部布地がめくれて、中身が表に顔を出している、物騒なそれは太陽の光を反射させてアリタの足元を照らしていた。

か細いアルフ族の綺麗な足は、それは小さく、それは微細に、しかしはつきりと震えていた。

そう、今日は決戦の日。

そして作戦決行時刻は刻一刻と迫っていたのである。

丘を下りた港町の広場にはすでに決戦準備を整えた彼らが真剣な面持ちで武装や作戦の確認を行っていた。

本隊である彼らは、作戦決行場所である野原に陣取って飛龍を待つ。そして、陽動隊が囷になっている間に迅速に飛龍を倒さなければいけないのだ。

「いいか？分かっているとは思うが我々が臆しては作戦実行に支障が出る。」

隊員たちは皆一様に真剣な眼差しである。

「飛龍は喉、そして首元、目が弱点だ。それ以外の場所は硬くて刃が立たんからな。」

『了解！』

ダシンはそこまで言うと、自分達の荷物の点検に戻るように促した。そしてすつと顔を上げ、街の入り口から今に出発しようとしている陽動隊のメンバーに軽く会釈を取った。

陽動隊のリーダーはこれを受けてこくりと頷いた。

小さな小人族の頷きを見れたかどうかは定かではないが・・・。

陽動隊は出発した。

本隊の皆も準備が整ったようだ。

「さあ、野郎共！気合を入れて行くぞ！」

皆が一様に拳を振り上げ、掛け声を上げようとしたその時。

「ぎゃーーーーー！！！！」

甲高い悲鳴とともに女性NPCが街の外れから走ってきた。

「ワイバーンよ！！　ワイバーンが来たわー！！」

それは一瞬にして本隊まで伝わった。

目配せで命令を下すと、ダシンは「フラッグランス」を手にNPCの所に走った。

隊員達もそれぞれに武器を持ち駆け出す。

街のざわつきは丘の上まで響き渡り、家を出ようとしていた三人にもびりびりと伝わった。

「飛龍が街に?!」

ヨミはすぐに支度を整えるとアリスの行方を追った。

アリスは扉の前で何やらリュックに詰め込んでいるところだ。

「アリタ。　わたし達も飛龍の迎撃に向かわなければ。」

少し離れたところで様子を伺っているアリタは声に耳を貸そうとせずにある方角を見つめていた。

ヨミも導かれるようにその方向に首を向けると、そこには紛れもない……イトで見ることになったモノと同じ、飛龍がこちらに向かって飛んできていたのである。

「ワ、ワイバーンッ！」

ヨミはアリスを背に飛龍を見つめながら叫ぶ。

「アリタ！」

「ヨミ、相手は一頭よ落ち着いて。」

両手でソードを構えていたヨミは、ハイと返事を返し一度ゆっくりと瞬きをした。

「いいかい？　すぐに奴はこっちに来る。」

ヨミは視線を変えずに返事をする。

「おそらくアリスが目当てでしょう。この前の事で・・・」

腰に下げた鞘を軽く撫でながらアリタは言った。

「・・・恐らくはこれで・・・お別れになるかも知れないね」

「えっ？」

ヨミがアリタに視線を移す前に、アリタは飛龍に向かって駆け出した。

「アリター!!」

「見ててえ！」

叫び声で返事を返しながら、アリタの姿は小さくなっていった。

「ヨミ？」

一部始終を見ながら、慌てふためいていたアリスがそっとヨミの顔を見上げる。

「アリス、アリタを助けましょう。」
「うん。」

二人はそれぞれの武器、ヨミはソードと煙幕玉、アリスは短剣と弓をそれぞれ持った。

第17話：ワイバーン飛来、アリタの過去（前書き）

ものすごく日が空いてしまつて申し訳ありません。
かなり不定期で申し訳ないのですが・・・
まだまだ物語が続きます。
よろしく願います。

第17話：ワイバーン飛来、アリタの過去

火球はアリタの頭上をかすめた。
ちりちりと辺りの草が焼け焦げる。

飛龍はアリタに向かって二度目の攻撃を加えようとしていたが、アリタはそれをさせなかった。
腰に挿した鞘から剣を取り出すと、剣だけを持ち直し鞘を飛龍に向けて投げた。

カチッ

飛龍の顔に鞘が当たる。

驚いた飛龍は攻撃を止めた。そして辺りを見回すと鞘の主の姿は見えなくなっていた。

滑空する速度を羽ばたきで抑制しながらゆっくりと下降する。
ドシンと音を立てて飛龍は地に降り立つ。

「このままだと危ないか…」

草陰に身を潜めて呼吸を整えるアリタ、頬を一筋の汗が撫でる。

飛龍はやがて狙いを元に戻し、きらりと光る丘を見上げた。

そこにはアリタの家がある。

そして、その家に並ぶようにアリスとヨミが武器を構えこちらを伺っていた。

アリスは弓を引き絞り、狙いをつけ矢を放った！
しかし矢は飛龍の脇を抜けてしまった。

矢を継ぎなおす。

飛龍は大きな巨体をさらにむっと膨れさせたかに見えた。

否、飛龍はぐつと接近していたのであった！

ヨミは煙幕玉を飛龍の向けて投げつけた！

玉が炸裂し周りが煙に覆われる。

アリスはすかさず矢を射るが、煙に包まれた飛龍に当たったかどうかは定かではない。

しかし、アリスの場所は飛龍には分かった。

空気がぐぐつと縮むような音がした。

アリタは戸惑った、狙いはアリスとなると飛龍の行動は決まっている。

歯噛みしながらも自分の身を隠してくれていた草をなぎ払った。

「私はここだ！ さあこい！」

飛龍の鼻がひくついたかと思うと、ぐるりと首を回しアリタの姿を視野に納めた。

グガラアアア！

その口から周りの空気を揺るがす大轟音を猛鳴らすと、翼を一扇ぎしアリタめがけて飛び上がった。

『アリタ！』

様子を見ていた二人は絶叫した。

が、次の瞬間・・・

ガチィッ！

ヨミの目は見覚えのある光に照らされた。

アリスはそんなヨミを横目にみつつつぶやいた。

「あれは、剣？」

飛龍はしたりと狙いを定めアリタに飛び掛ったのだが、その凶暴な顎をアリタは自らの剣で止めていたのであった。

腰に収められていた懐かしき光、アリタは目の前の光景とは違う別のモノを目で追っていた。

「久しぶりに構えたが、体が覚えた癖は直らないみたいですね。」

アリタは剣の軸心で捕らえた顎をずらし自らはそれを足場に飛龍の上へと飛び上がった。

飛龍はバランスを崩してその場に頭から突っ込んだ。

地面がえぐれ、大きな口で土を掘り起こす格好になった飛龍は一度目に入った土を落とすため瞬きをした。

しかし、勝負の時はその一瞬で決したのであった。

出発する前にと、三人は体の点検を行った。

怪我や異常個所を探したがさした問題は無いようだ。

家を離れ、馬車で移動する3人だが、運転席の二人と荷車に座り込んだヨミは一言も言葉を交わさなかった。

「ヨミ・・・」

アリスは心配そうな顔をヨミに向けている。

そして、手綱を引くアリタの手も心ばかり震えているように見えた。二人を見ながら少女もまたずっと口を閉ざす。

沈黙をといたのはアリタだった。

「あれは、私が委員会に所属していた頃の話かな・・・」

アリスはアリタの方を向くが、アリタの目は遠い虚空を見つめていたのだった。

荷車のヨミもピクリと反応をしたが、すぐに顔を背ける。

手綱を引くアリタはぼーっと道の先を眺めながら坦々と言葉を連ねた。

確かに、あの時の判断は間違っていたのかもしれない・・・

私が今ココにこうして居ることが出来る。でも、あの時道を失った魂たちは一体どこに行ったのか・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

爆音が響き、砂埃が舞う。

空は暗くそして煙で濁っていた。

オークス大陸は今大戦争の真っ只中であつた。

中央から各専有大陸に逃げ伸びようと必死になるもの。

中央に残り、オークからセントマールを守ろうとするもの。

そして・・セントマールの中央広場では今まさにオークと人との戦闘が行われているのであつた。

そして、ここはその広場から少し離れた作戦指令小屋である。

「どうしてなんだアリタ隊長！　なぜ後方支援をしないのですか！」

「隊長！　このままでは前線を押されて各区域に届かなくなつてしまいます！」

机の上でじつと明かりを見続けているアリタ・・返事をする気配は無い。

沈黙する部屋を突き破るようにして斥候が扉を開けた。

「報告！　前線に流れてきたオークが向きを変え広場より離れてゆきます！」

「なんだと！？」

「情報によると海岸線へ向かう道を進んでいくようです！」

「どういうことだ・・・我々を見逃すとても？」

ガタッ！

アリタは席を立つと斥候の元へと駆け寄った。

「街の被害はどうなっていますか？」

「はい、私が見た結果であれば報告できます。広場の兵員はほとんど壊滅、ロストした人数にかんしては把握していませんが・・・50を超えるとのことですよ。」

「そうですか、ありがとうございます。」

アリタは向きを変えると部屋に居た二人に声をかけた。

「ダシン、救護班と連携して人員の救助にあたれ、私はオークを追跡する。」

「隊長・・・待ってください。我々だけでは人手が足りません！支援隊にも連絡を取って・・・」

「二度は言いません。ダシン後のことは任せました。」

ガチャ・・・

アリタは扉を開け表へと出て行った。

「一体・・・一体何を考えているのですか、アリタ・・・」

小屋を出たアリタは真っ直ぐにオークの後を追いかけて行った。その腰には少し眺めのソードが鞘に入り収められていた。

小屋で啞然としているダシンの元に一人の若い兵士が声を荒げて絡

んだ。

「おい！ 副隊長さんヨ！ これは一体どうしたことなんだ？ アア？」

兵士はダシンの胸倉をつかみながら執拗に迫りよった。

「ケイク、落ち着け。オークは後退した。今は人員の救護にまわるんだ。」

「その救護するはずの部隊が、なぜアンタを入れてたったの5人しか居ないんだ？！」

「・・・・・・」

「他のヤツラはどこに行ったんだよ！ 隊長の命令ってなんなんだよ！ 答えるよー！！」

「・・・・・・」

「ケっ！！ どうせあの腰抜け隊長のことだ！ 自身の安全優先なんだろうよー！！」

ダシンは掴まれている腕を握り返した！

「それ以上・・・それ以上言うようならこの腕をへし折るぞ！」

「へ！ やってみるよ、貴重な人材が一人使えなくなるだけだ！」

パツと手を離し、ケイクは表に出て行った。

ダシンは我に返ると、すつとテーブルに置かれた指令書を手に取った。

後方支援にあたつて

救援部隊および第三駐屯軍

以下後方支援隊

はプレイヤーの占有国への避難を優先すべし。

また、アルフェイトへの避難路は最優先すべし、
そして、最も警戒するべし。

アリタ

「・・・」

ダシンは表情を曇らせている。

セントマールの防衛を捨ててまでの避難路の確保に意味があるのか。
そして、アルフェイト・・・

「隊長・・・一体何を隠しているのですか・・・」

ダシンは指令書を元に戻し、表へと出て行つた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・リタ！・・・アリタ！！」

ハッとした。

手綱を引き、ぐぐぐと馬を止めた。

すぐ横を大木がかすめて、危うく馬車を壊すところである。

「す、すまない。 もう大丈夫だ。」

「びつくりした！ 急に動かなくなっちゃうんだもん。」

アリスは心底驚いたようであった。

そして、その後ろではヨミが体勢を整えて、手綱に手を伸ばしかけていた。

「ヨミ……」

「……」

「君のことは指令書の隊員欄に名前が載っていたのをすっかり覚えている。」

二人の間にそして、アリスがおろおろとするなか沈黙が続く。ヨミはうつむいて、アリタはヨミをじっと見つめるかたちで。

「……話は……後から聞きました。」

「……ヨミ」

「我々の……わ、私の……部隊は最後の生き残りだったと……」

「……」

「いいんです。今までそうやって忘れていました。ケリはつけたん

です・・・ただ・・・」

ヨミは顔を上げた。
涙が目には浮かんでいるのが分かる。

「ちょっと、その・・・思い出してしまったので・・・」

「私をもっとしっかりしていれば、まだ被害を抑えることは出来たかもしれない・・・」

アリタは何か言おうとしたヨミを制した。

「各隊にはほとんど囷になってもらったようなもの・・・」

「・・・」

「許して貰えるなんて思っていない。しかし、私にはまだするこ
とがあった。」

アリタは手綱をぐぐつと握り締めた。

「アリタ・・・」

ヨミはアリタを見つめながらそつと手綱を握る手に自分の手を重ね
た。

「私たちの種族は数が多いことと何も持っていないくても空を飛ぶこ
とが出来る。」

「・・・」

「よつて、救援部隊として任命され・・・そして、逃げる時には囿になった。」

アリタはすつとヨミの方へと顔を上げた。

ヨミを見つめる目には熱っぽいものが溢れていた。

そして、もっと自分を非難してくれとも伝えているようだった。

「貴方が参戦しなかった訳は誰も知らないけれど、ある人はこう言っていましたよ。」

アリスはじつと二人の様子を見ていた。

そして、ヨミの服をすつと握った。

ヨミはアリスの方を向くと、軽く首を振り、アリタへゆっくりと声をかけた。

「オークの大部隊が各専有諸国に攻撃を加えないように、アチラのボスとの話合いを持ったと・・・」

「・・・」

アリタの顔が少しだけ明るくなった気がした。

「そして、もっとも大規模な避難船の前に青いきれいな光が我々とオークを隔てるように光輝いていたと」

・・・ヨミはさらにもう一方の手を、アリタに重ねた。

「間違いなんてどこにも無かった。ただ、問題の回答群には貴方の求めるべき答えが無かった。」

ヨミはすつと目を閉じて、そして、その後にこりと笑って見せた。

「あの剣の輝き・・・あの青白い光・・・噂はずつと聞いていましたよアリタ・・・いえ」

ヨミは少し後ろに視線を流し・・・また元に戻す。

「セントマール委員会、第三軍隊長、ジルエーディアのアリタ。」

アリタの腰に刺さった剣がまた懐かしい光を放ったような気がした。

第18話：戦いの息吹

ダシンは丘を駆け上がっていた。

飛龍の影は明らかにアリタの家を目指していたからだ。

しかし、その足はゆっくりと速度を落としてゆく。

目の前から来る馬車を迎えるかのように。

「アリタた・・・アリタさん、アリス、ヨミ、無事でしたか。」

彼は馬の前から横に避けると、ひょいと馬車の足場に飛び乗った。

「ええなんとか。少し火傷をしてしまったかもしれませんが、それ以外は擦り傷ですよ。」

「私も問題ありません。」「わたしも！」

ダシンはふつと息を吐くとそのまま荷台に飛び移った。

アリタの腰には抜き身のままのジルエーディアがユラリとその存在を示している。

ダシンの目に映ったその煌きは彼の二の句を消していった。

「ダシン、先の飛龍はまさかでしょうが・・・」

「確かに、その可能性は考えられますが…まだ彼らからの連絡はここに届いていませんので。」

「そうでしたか…」

アリタは微かに憂いたような目を残すと手綱の先に目をやった。馬車を引く馬は蹄を軽やかにならし道を進んでゆく。丘をずんずんと下り、辺りに街の喧騒が広がってくる。

ヒュッ

ダシンは軽く身を翻らせ馬車から降りた。

彼はアリタを見上げると軽く手を振り向きを変え走り出した。

街の北に大きな門が見える、ダシンが向かうその場所にはすでに隊列を整えた討伐隊が列を整えていた。

二十人に満たない勢力ではあるが、その手に握られた武器には力が込められている気がする。

今か今かと待ち続けるその様子は、震えていると言ったほうが良いのであるうか…。

アリタ達の乗る馬車もゆっくり門の下へと進み、全員が集合した。

「これより、飛龍討伐作戦を開始する。」

ダシンの号令とともに皆々の目が遠く先を見つめる。

「すでに陽動隊が出発し、先ほど伝令の者から配置についたと連絡があった。」

大きく息を吐きながら、全員の目に訴えかけるように視線を移してゆく。

「では出発する、これより先、もちろん飛龍の襲撃も考えられる。各々周囲の警戒をしつつ前進！」

『おおーっ！』

隊は行進を始めた。

アリスの遊撃隊は討伐隊の後方にピタリと付く、目的地であるイトの南を目指して。

……一行はイトを右手に見ながら平野を通る道を南下してゆく。

この先には大きく開けた広場があり、こんな時でなければきれいな花が辺りを埋め尽くし色とりどりに染め上げていたことでしょう。そして、先行していた討伐隊がゆっくりと足を止めてゆく。広場が見えたのだ。

そこには巨大な影が5つ動きまわり、その上空を二つの影が旋回している。

飛龍である。

皆が少し騒がしくなる中、ダシンがスツと隊の前に進み出た、それを境にざわつきが消えてゆく。

ダシンは隊を振り返りながらゆっくりと目配せをし口を開く。

「これより作戦を開始する、陽動隊はあの飛龍群れ近くの草原に隠れている。」

隊にグツと力がこもる。

「合図とともに我々は二部隊と遊撃隊に別れ飛龍を迎え撃つ。アリタさん。」

「ええ。」

ダシンはくつと飛龍の姿を見据えた。

「では行くぞ、合図、放て！」

ぱつと二人が前に進み出た。

肩には大口径の鉄砲、この場合は大砲というべきであろうか。

火薬の爆発力を活かし、重量のある物質を遠くへ飛ばす武器だ。

二人の担ぐ大砲に火が着けられる。

ジジジと音を立て、火薬へと続く導火線がみるみる縮まってゆく。
そして…

ドオオンっ！

大砲が火を噴く！

大きな黒い塊がそれよりもはるかに大きな塊に向かって飛んでゆく。
音が鳴るとともに飛龍達がこちらに気づいて、大きく体をしならせた。

撃ち出された弾のうち、一発は飛龍の足元に当たったようだが、あまり大きな効果は無かったようだ。

しかし、もう一発のほうは見事に飛龍の首元に辺り飛龍は大きく仰け反った。

飛龍の視線が一行を睨み付ける。

その目に怯む者、その目を睨み返す者、両者を挟む距離は長いが空気は同じものへと変わってゆく。

戦いの匂いが広がってゆく。

「行くぞ、みんな」

ダシンは誰に言つとでもなく口ずさんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4917d/>

アドネイル

2010年11月20日15時25分発行